

大正七年十一月發行

校友會雜誌

第拾七號

山口縣立萩中學校校友會



# 萩中學校校歌

略譜

4/4 へ調

5   1.135   3-21.1   2.1 32 12   3-04			
ア ダニハタ タ シマナ ビノミ一チー ニ ア			
ウ ハベノカ ザ リハハカ ナキターノー ミ コ			
4.2212   3-65.5   5.65#4   5-03.4			
ダニハヨ一 マ シチマ キノフ ミ チ フ一			
コロノマコ ト ヅタフ トキタ カ ラ マ一			
3-22.3   2-11.1   2.212   3-05			
ミ ノハヤ シ ニハナ ハサクト モ ミ			
ツ フヨソ ホ フユキ モヒトト キ モ			
5.535   6-53.3   3.125   1-0			
ナムスパ ズ ナニ ニ カハセ ソ			
ト一ノミ ドイハチト セモキエ ズ			
5.5   1-0171   2-04.4   4.365			
マモ レ シツワ ツ テン チニハヤ			
5-43.3   3-11.2   3-55.5   6.655			
ヌ一クワウ メ一セイ ダ イコレ ヨリイデ			
1-0			

山口縣五  
萩中學校

## 校友會雜誌第七號

### 故雨谷校長十五年祭

大正七年十月十二日、我が校友會に於ては、故の校長雨谷兼太郎先生の、十五年祭を執行せり。講堂を以て式場に充て、北位に祭壇を設く。壇は、正面に幔幕を張り、床にいつの筵を敷き、八脚机を置きて、神籬を其の上に立て、廻りに注連を引き延べたり。素朴清楚のしつらひ、誠に神々しさを覺ゆ。祭事は、三名の神職して之を掌り、式は、午時一半より開始せらる。教職員・生徒來賓一同着席するや、先、禊式・降神式・獻饌等あり。終りて、齋主(縣社志都岐山神社社司田村繁行氏)祭詞を奏上し、祭主(岩田校長)祭文を奉讀す。次に、齋主・祭主・教職員總代・生徒總代・來賓總代の順序にて、玉串を捧典し、次に、撒饌・昇神式等ありて、一同退場し、無事終了せしは、同一時半なり。此の間、滿堂極めて靜肅にして、森嚴の氣場内に溢れ、悽愴の念胸裏に充ち、人をして、洋々乎として、其の上に在るが如く、其の左右に在るが如き感を起さしむ。式後、參列の同志會員諸君、及び故人と縁故ありし諸氏十數名に、別室に於て、形ばかりの茶菓を供す。互に、故人の在りし昔を憶びて、懷舊の談に時の移るを覺えず、感慨いと深かりしを見受けらる。かくて、一同解散せしは、同四時過なりき。校長の祭文左の如し。

金氣肅殺トシテ、鴻雁雲ニ叫ビ、風萬木ヲ吹キテ、落葉雨ノイトレ。ア、故ノ山口縣立萩中學校長雨谷羔太郎君ノ永眠ニ就カレシハ、實ニ、斯ノ如キ秋闈ノ候ニテアリキ。指テ屈スレバ、此ニ十有五年。逝クモノ還ラズ、ウタ、光陰ノ倏忽ナルヲ恨ミ、追想禁セズ、遙ニ、美人ヲ天ノ一方ニ望ム。ア、人固ヨリ事業ノ世ニ著レ後人ヲシテ感セシムルモノナキニ非ズ。其中道ニシテ斃ル、ニ至リテハ、後人痛惜ノ念勝ケテ言フベカラズ。况ヤ、其徳ノ人ニ入ルノ深キコト君ノゴトキニ於テナヤ。熟々當時ヲ回顧スレバ、本校、方ニ創業ニ際シテ、氣運未ダ開ケズ。君、乃チ重任ヲ荷ヒテ局面ノ發展ニ勉メ、文武ヲ勵シテ、校風ノ振起ヲ謀ラレタリ。是ニ由リテ、本校ノ教育事業ハ、始テ緒ニ就キ、漸ク盛チ致シ、シカシテ君ノ五年長ノ拮据斡旋ハ、將ニ校運ヲシテ理想的進路ヲ爲サシメズハ己マザラントス。是實ニ地方人士ノ齋シク認知スル所ニシテ、不肖博識一人ノ私言ニ非ズ。是以ヲ以テ、君ノ一朝ノ溢亡ハ、校中數百ノ子弟、及ビ、大方有識ノ士ヲシテ梁木壞顔ノ歎ヲ發セシメタリト雖、其礎ヲ確立セシ事功ノ、悉ク後繼者ノ模範トナリテ、事業ノ進展ニ多大ノ澤ヲ及ボシタルハ、決シテ疑フベカラズ。亦偉ナラザランヤ。君、天性深沈ニシテ剛毅、質直ニシテ篤實、其ノ人ニ接スルヤ、温情坦懐、城府ヲ設ケズ、各其言フ所ヲ盡サシメ、事毎ニ、率先實行ヲ以テ之ヲ鼓舞獎勵シ、終始至誠ヲ以テ一貫シ、頗ル古武士ノ風ヲ帶ビ、其丰采得テ忘ルベカラザルモノアリ。不肖博識、己ニ乏シキヲ校長ニ承ケ、日夜惶々トシテ、唯先業ヲ失墜スルアラントコトヲ是レ懼ル。爰ニ君ノ忌辰ニ方リ、校員ト相謀リ、齋戒沐浴シテ、校中清爽ノ處ヲ擇ヒ、庶羞ヲ供シテ

神靈ヲ迎へ、以テ追祭ノ敬誠ヲ致ス。尙クハ昭明憲高髣髴トシテ來リ饗ケタマハンコトヲ。

大正七年十月十二日

山口縣立萩中學校長 岩田博藏

校歌制定

今回、我校にては、日夕、校訓として遵守しつつある松陰先生の士規七則中に於て、特に、質實・義勇の二大徳目を選び、之を主題として校歌を制定し、十月十八日の開校記念日を卜して、之を發表せられたり。今や、世上靡聲頹りに起りて雅樂を亂し、心ある者をして、竊に耳を掩はしむる時の方、茲に健實なる校歌の制定を見たるは、誠に、本校教育の爲、慶賀すべきことなり。自今以後、本校生徒たるもの、明窓の下、淨几の邊、業餘時に之を誦せば、其の徳性を涵養するに於て、裨益する所蓋し多かるべし。今左に校歌要旨を掲ぐ。(校歌及略譜は巻頭に在り)

校歌要旨

凡そ修學の要は、身を修め世を益するに在り。是實學なり。其要を知らずば、多く學ぶとも、得る所なけむ。之を浮虛といふ。宜しく虚を避けて實に就くべし。一たび其要を知れば、安じて

之を行ひ、至誠を積みて之を勵むべし。若し成功を急ぎ、或は人に知られむの心ありて、表面を飾ることあらば、中心の誠衰ふべし。飾は文なり、誠は質なり。宜しく文を末とし質を本とすべし。質は文に對する消極の名、實は虚に對する積極の名にして、其事は一なり。故に、質實は、虚ならず文ならざる中庸の名なり。士こゝに居らば、以て愧づることなかるべし。是れ質實の歌の意なり。

勇者勝ち怯者敗るゝは、常の勢なり。然れども勇正義に出でざれば、其勇以て久しく人を服するに足らず。正義に由りて振へる勇氣は、猶、源ある流の沛然たるが如し。誰か能く之を禦がむ。願ふに、宇内萬國、大小強弱の争、底止する所を知らず。此間、唯だ正義のみ能く彼の横暴を抑制すべし。しかして、其義を行ふに、死を決して勇を振はざれば、國運の發展、人道の擁護、得て期すべからず。之を要するに、義は勇に因て行はれ、勇は義に因りて長ず、大日本國民が平和保持の使命を世界に行ふは、一に、大義大勇を用ゐるに在り。これ義勇の歌の意なり。

大正十一年十月十二日

訓話

校長訓話三則

一、浪仙苦心の兩句

昔私は近く物の本を読んで見て、數行の涙を流した話がある。支那の隋唐の代に、浪仙(賈島の字)といふ人が居た。三年間を費して、斯う云ふ句を作つた。「獨行潭樹影。數息池邊身。」として自分から、此の兩句は、千古不朽の名句のつもりであると云つて、大に誇りし居た。所が世間の者は、「一向名句であると認めぬのである。それで浪仙は、「兩句三年得。」吟雙浪流。知音如不賞歸臥故山秋。」と述懐したさうである。私は浪仙の心事を付度して、同情に堪へぬのである。三年掛つて、生懸命に、よくも研究を續けたものである。何とかして、名句を得んと思ひ、十字の句を研究するに、三年も懸つた。當時の人は之を見て何とも思はなかつた。私は之を讀んで大に同情した。「浪仙君よ、歎き給ふな。後輩我等の如き同情を表するものが、一人や二人は居るから」と云はんとするのである。精根を盡してやれば、事業は積く。否らざれば、永久に涙を以て報いられることはないのである。

## 二、鰻の淵登

私は、一夏自己の體力を試みるべく、朝の五時より夜の九時十五分まで、旅行をした。其の時に感じた話がある。佐々並川を沂ること二里許の所に、魚切と云ふ所がある。險岨であつて、ここより上へは、鮎などの昇ることが出来ぬといふことである。先年佐々並の者が、縣廳に願つて、此の難所の傍に、魚階を作つたのである。これは魚をして登らしむべく、巖石に幾階段も刻み付けたのであるが、しかし、なかなかこれも險岨である。鮎は水中では澄濁たる元氣を持つから、ここをよく登り得て、河源に達することが出来るのである。さて彼の魚階を水が流下するには、流れては渾り渾りては復流れると云ふ風である。そこを何心なく見て居ると云ふと、長さ四寸許の鰻が、魚階の側の水勢が比較的弱い所を登るのがある。五階段ある中を、既に三階段目まで登つて居る。實に苦心慘憺をして登る。動もすると水に流れて下に落ちる。之に屈せずして、元氣を奪ひ起して復登る、かくするものを三匹までも見た。一體鰻と云ふ魚は、海中にて孵化するさうである。それが三箇月もかかつて、大川からして、佐々並川の如き急流を登る。しかも長さ僅に四寸位である。私は此の元氣には實に感心した。私はあんなに精力を具體的に表されたものを、今まで見たことはない。諸君我々も之に鑑みて奮起せねばならぬではないか。

## 三、秀忠の沈勇

徳川家康が會津を征伐の時、下總の小山まで出掛けた所が、ろこへ突然に、西方石田三成が、諸大名を率ゐて反旗を翻したと云ふ報知があつた。其の際に家康の息子三人が、家康の傍に侍つて居

た。二男秀康は、此の報に接して、面白い平素より鍛へた我輩の武勇を試めすは此の時であると思つて、手を拍つて喜んだ。四男忠吉は、兄さんのいはれた通り、私も、此の際、手腕を試すため西方に向つてやつて見たい。事は大分面白くなつて來たといつた。所が、獨三男秀忠のみ、意氣揚らず、見る者多く秀康忠吉を、勇氣充滿せる雄將とし、秀忠をば、臆病者であると評した。所が、又或者は、「秀忠は、一頭地を抜いた雄將である。元來、天下の者をして、己の下風に立たしめんとするのが、徳川氏の理想である。然るに、反旗を翻すものがあつては、これは、徳川氏に取つて、ゆゆしき一大問題である。天下の統一せざるは、徳川氏の爲に至極殘念なことである。徳川氏が、今東に向つて進むに、西方には、反旗を翻す。これ統一の出來ぬ證據である。故に秀忠は、意氣消沈して居るのである。」と評した。誠に其の通りだ。秀康は勇あるも將軍となることを得ず、秀忠は、二代將軍となつて、其の盡した功は偉大であつた。元氣とか勇氣とかいふものは、之を出すべき形式をよく考へねばならぬ。よく自分の立つべき大責任を盡す勇氣の形式を考へざれば、失敗することになる。秀康は、立派な能力が無かつたから、秀忠に後れを取つたのであると思ふ。青年の時からよく物事を考へてやつて貰ひたい。

(大正十一年八月十日) 徳川家康の遺言(一) 〇 X 主筆 編輯

### 三浦子爵訓話五則

(大正七年一月八日始業式に於て岩田校長の紹介せられし者) OK 生筆記

余(岩田校長)は、昨年上京の砌、福原男爵の紹介に依つて、長州の大先輩たる三浦子爵を訪問した。其の際子爵は、手澤に染つた日本野紙本を取出し、「これは僕の日記だが、此の中より、参考になる話を、例を擧げて爲よう」として、一時間半は、諄々と語り出されたものが、此の訓話である。これは皆事實の問題であつて、誠に面白く感じた。一體、天地は我等に絶えず教訓を垂れるのであるが、我等は子爵の如く、天地自然の教訓を受入れることが出来なものである。我等は我等の力で、此の天地自然の教訓を領解しなくてはならぬ。其の領解力の有無で茲に賢愚が分れてくるのである。今この訓話の一二を紹介するから、諸子は之を以て精神修養の材料とせねばなぬ。

#### 一、蛙に燕

さいつぞや自分の手洗鉢の側に、澤山の蛙の子が出来たことがある。小さい奴が、ヒンヒンと飛んだり、水の中に入つて遊びだりする。丸で教育も受けぬ奴が、此の如きことをやる。實にえらい奴だ。又向ふの軒端には、燕が巢を懸けた。左官の學校も卒業しない奴が、柔かな藁や毛をわがね、粘土

を以て之をひつ着けて組み立てる。近頃の教育は猿に藝を教へる様なものだ。一も精神がない。人間には誰にも蛙の子の様に、働くべき力がある。燕の様に働くべき能がある。之を發揮せねばならぬ。澤山の本を読むよりも、澤山ある例で、悟ることが出来る。教師に頼らなければならぬと云ふことは意氣地のないことだ。二、教育と藪

教育は藪の糸を繰出す様なもので、無理があれば、糸は出ない。順序よくやらねばつまらぬ。萩の青年の中に藪の糸の様に、粘強く光澤のあるものが居るかどうか。

#### 三、馬頭観音と牛馬

昔は馬頭観音が、繁昌した。これに牛馬を連れて參詣する。此時には皆牛馬を飾り立て、行く。つまり牛馬を御ふものが、牛馬の展覽會を開くのだ。さうして馬頭観音に、牛馬の祝福を祈るのである。此時に瘦せかけた奴を連れて行くのは、飼主に取つては實に恥しいことだ。肥え太つた奴であるので、それで面白がる。此頃は、動物虐待なと屁理屈をいふが、昔の者は虐待はせぬ。いやら馬子が九段阪を、馬に澤山の荷物を牽かして登りよつたが、八分目まで登つたら、馬は重荷に堪へずして終に斃れた。悠然であつた。大體馬子などには、馬の牽くべき荷の程度は、よく分るものだ。それを怨ばるから、かやうな目に逢ふ。そんな馬鹿な事は昔の人間はせぬ。少し考へなくてはいかぬ。

#### 四、地方の繁昌と朝起

自分は埼玉の熊谷なる歎欣寺に一泊したことがある。所が午前二時頃から大變參詣人がある。坊さんが、餘り騒々しくて、お休の妨になつたであらうと云つたが、自分は參詣人が多くて結構である云つた。歸りに熊谷の町を通つて田舎の方へ行つて見ると、農家がなかなか奇麗で貧乏らしくない。自分は手を拍つて、これだと叫んだ。地方の繁昌と朝起、どうも密接な關係がある。昔或人が、こゝらの百姓に、朝早く起きてお寺に參詣すれば必ず御利益があると云つて、奨励したさうである。成程朝早く起きて寺に參る。家に歸つて復寢るものはない。そこで早く仕事に取掛る。他の部落の者よりも餘計に仕事をする事が出来る。富むことは當前である。昔の人のすることは、能率が多い。今日は屁理屈ばかり云つて能率がない。

### 五、蜜蜂と蝦蟇

今はないが、庭に、中が洞穴になつて居た松の樹が有つた。ろれに蜜蜂が巢を懸けた。所が蝦蟇が縁の下から出て行つて、蜜蜂の出入するを、バクリバクリ食ひよる。ハ、あの蝦蟇めが、なかなか旨いことをしよると思つて自分は一種の興味を以て見た。或日松の樹の洞の前に、眞黒な石塊の如きものがある。怪んで之を見るに、蜜蜂が一ぱいたかつて居る。洋杖の先でつゝいて見るに、これは例の蝦蟇であつた。自分は驚いた。蜜蜂が怒つたな。定めて蝦蟇は閉口して居るであらと思つた。これは丁度日露戦争當時であつた。蜜蜂は餘程面白い奴だ。蜜は吸ふが花は害しない。蝦蟇は狡猾だ。大きな胴體をして、大きな口を以て、蜜蜂を片端から呑み込む。實に怪しからん。日露戦争は丁度さうである。世界の花を害しない日本といふ蜜蜂を呑みかけたので、蝦蟇の露をキョーキ

ユ一云はしたのである。蜜蜂の螫すのは、其の罪ではない。他より虐めるからである。人は蜜蜂の如くなければならぬ。

學業有<sub>リ</sub>章程<sub>。</sub> 妄意勿<sub>レ</sub>上下<sub>。</sub>  
源泉科皆盈<sub>。</sub> 混々不<sub>レ</sub>舍<sub>レ</sub>夜<sub>。</sub>

松陰



吉田松陰先生追慕會講話要録

(大正六年十一月二十一日講堂に於て)

特別會員

安藤 紀一

今日は、松陰先生の是詩に就きて解話すべし。

知恥士所重スレ 償過堂憚シヤ 累々四五級タケ 容易難得還ニギテ 滿身十餘創シヤ 鮮血濃未乾シヤ 友生有深意シヤ  
寅也銘諸肝シヤ

是詩は、熊本の佐々淳二の先生に贈りたる前田利家公像の模様を述べ、且其寄贈の好意を謝したる作なり。扱、先生は嘉永六年廿四歳長崎に赴き、遂に熊本にて佐々氏に會せり。前田公像を贈られしは其時なり。今其像松陰神社に蔵す。其畫様は、一人の騎馬武者、鞍の傍に首級三つを繩に括り、槍にも一首級を貫きて肩の上に差しかたげ、己も馬も多く創つきて、鮮血淋漓たり。是れ公が桶狭間より織田信長の陣營に馳せ還る圖なり。桶狭間は尾張に在り。正親町天皇永祿三年五月、今川義元駿河より攻來るを、信長寡兵もて夜半風雨に乗じ、之を此地に討議せし事、史上に著名あり。さて、前田公は、初は孫四郎とといひて信長に傍近く使はれし身の、一旦罪ありて勘當を受け居たる

が、此度の合戦に、拔羣の働をしてこそ、勘當をも免さるべけれど思ひ立ち、戰場に首級數多取りて歸りたれば、信長大に喜び、それより、罪を赦して元の如く召使はれたりとぞ。しかして、松陰先生も二十二歳の時の冬より翌年にかけて藩許を経ずして東北諸國を遊歴せられたることあり、此は他藩人に對する義理立てよりして、罪とは知りながら、爲したるは、實に己む得をざる事なりと思はる。其罪によりて、二十三歳の年の十二月に士籍を削られ世祿を奪はれたるは、其身家の大事變といふべく、恰も前田公が信長より勘當を受けたると同じの境遇といふべし。是實に佐々氏の此畫像を贈れる年の前年の事なり。こゝに先生は、益々自ら修養して國家に貢獻し、以て前過を償はむの一念を持たれたりと思はる。故に、十年間の諸國遊學を許され、二十四歳の春より家を出で、五月江戸に上り、十一月航海の志を抱きて長崎に下り、志遂げずして熊本に至りしが、英雄の心事互に披けば符節を合するが如く、江戸遊學以來親交せし佐々氏の先生に注意を與ふる所も、先生の自ら覺悟せる所も、皆此償過の一點に在り。故に先生は佐々の好意に感じて此詩を作られたり。詩の意は凡そ恥を知るは士の專要とする所なり。故に己の前過を懺悔するのみならず、其過を償ふ程の功を立てんと思ひて如何なる艱難も恐れず打勝たねばならず。公はその心にて戦ひ、四五級の首を容易く斬り、一束にして持ち歸られたり。見よ五體の十餘箇處の創で、鮮紅の血の猶乾かぬ有様、實に勇しからずや。公の心の如く前過の償となる功を立て、再び藩侯に祿仕せよと注意せる親友佐々の深意は、この寅次郎の肝にしるして永久忘るまじとなり。五言八司再三朗誦すれば、先生の心事躍々として人に迫る感なくんばあらず。

此の償過といふ事は詩の主眼なり。夫れ過ちては改めよとは誰も言へども、その改むる工夫に至りては、言ひ破ふるもの稀なり。今考ふるに、前過を懺悔するは將來之を再ひせしむの心となる故に、それ丈の益はあるべけれども、それは尙消極なり。更に進みて、前過を掩ふ程の功を立て、こそ、始めて前過の償となるべければ、是に至りて、既往と將來とにかけて改むるといふ意義を全うせりと謂ふべし。要するに、前過の償となる功を立つるは積極的改過なり。學生諸子よく此意を體して、既往の過失は、唯だ懺悔のみにては消滅せぬ事、眞成の改過は獨り償過にあること忘れぬこと肝要なり。

### 山川東京帝國大學總長講演要旨

(大正七年三月九日卒業式に於て)

OK 生 筆 記

諸君が御承知の通り、歐洲の大戦否寧ろ世界の大戦は、殆ど四箇年に亙つて居りますが、獨逸はなかなか強くて、屈服する様子は見えぬ。勿論結局に於ては、日本及び其の與國の勝利に歸すべきものではあるが、今の所は、それまでには行かぬ。殆ど四箇年間獨逸は戦つて餘程強い。勿論獨逸にも與國はある。然るに、ブルガリヤ、トルコは勿論、アテチス、オーストラリヤは幾何か力を添

へて助けては居るが、種族の違つた人種であるから、動もすると内亂を生ずるので、到底頼みにはならぬ。それで獨逸は殆ど一國で全世界を敵として、まだ屈服する様子が無い。抑此の原因は那邊にあるか。敵ながらも天啓であると云はねばならぬ。云ふまでもなく獨逸が、條約を破り、野蠻極る暴虐をなすことは、悪みても餘りあることながら、四箇年間も屈服せぬといふことは、敵ながらも歎賞せねばならぬ。さて其の原因は種々あらん。それに就いて諸君のお考にならんことを希望する。私の考では、獨逸人中の智識階級の人が、愛國心に富むことは、争ふべからざる事實で、近頃我が與國の新聞、并に我國の新聞に載する所に依ると、智識階級の高い者も、非行亂暴を敢てする様だが、しかし獨逸人は、古のスパルタ人に似て、自ら資すること薄く、慾望少し。祖國の盛んになることだけを考とする所は勿論よい。しかしながら、此の獨逸の爲め獨逸の爲といふことだけ考へて、正義人道に考へ及ばぬのは、智識階級の大きな誤である。しかし然ゆるが如き愛國的精神は、實に歎賞に値す。彼等の既に口にする所は、何を爲すにも獨逸國の爲にせねばならぬと云ふにあり。人の行は、正義人道の範圍内に於て爲すべきものなるを、過つて、獨逸の爲ならばと云ふことをしても善いとの考を持つ。條約を破棄する。白耳義の中立を侵す。ろうして恬然として恥ぢない。これは慥に罪惡である。

個人主義と云ふものは、國家があつて後に云ふべきものである。露國はどうであるか。あんな風の國になつたなら、腕力の強い者が勝つ。個人主義も何も無いのである。國家が有つて、生命財産を保護する故に個人を安全にすることが出来る。個人の權を餘り強くして、國家の權が無くなる。

露國の様になる。國家の力は實に大切である。動もすると國家を忘れる人が無いでもない。個人の權利は國家が有つてから伸張することが出来るから、國家が一番大切であると云ふことを記憶して貰ひたい。一旦緩急ある場合は、愛國心に待つ外はない。獨逸の長所(愛國的觀念)は、學ぶべき價値あるものと思ふ。諸子は夙夜この愛國心を養成することに努力せられんことを希望す。之を今日の祝辭に代へます。

### 中川本縣知事講演要旨

(大正七年三月十四日講堂に於て)

井上盛義  
高羅芳光  
筆記

諸君は、青年團に、國家が如何に重きを置いて居るか云ふことを知つて居られよう、内務大臣の訓令にも、「青年團は、國民修養の機關で、國家の發達に最も重大の關係を有するものである」としてある。それ故に青年團は、内務・文部・農商務・陸海軍諸省に於ても、重要視せられて居る。これに依つて、縣廳・郡役所・市町村役場は、この青年團の教養に力を注いで居るのである。然るに中等以上の學校の生徒に對して、この設備の無いのは、何故であるか。これは、當然同時に起るべき

感想で、或は、片手落ではないかと思はれる。而して事實はさうでない。青年團は、小學校を卒業して、それ以上の學校に入ることが出来ずして、直に實務に就く者に對しての設備である。そしてこれらの小學校をのみ卒業した青年は、それ以來學ぶ時機がない。而して其の儘に放任して置くのは、國家が善良なる國民を教養する所以ではない。小學卒業後、やはり彼等は、壯丁に達すれば、軍務に服せねばならない。されど、小學校卒業後と、兵役までの間とを、無教育で過すと、國民の大多數は、頼り無い人、即ち、國民的訓練のない人となるのである。そこで彼等を教育する爲に、この青年團なるものを設けて、重きを置く次第である。されば國家が、修養ある國民を作ることを望むことは、最も切である。この故に、充分に修養せられ、且つ、薰育せられつゝある中學生に對して、青年團としての修養を説く必要はないのである。小學校を卒業したのみに對して、青年團を設くるのは、修養ある中等以上の學生に準じる爲に、國家的に彼等を教育して、將來剛健なる精神を有する、健全なる國民たらんことを、中等學生に望むと同様に、青年團にも望むのである。又、山縣元帥が、青年團に關してのみ、手厚き手紙を寄せられたと思ふ者があるが、それは大なる間違であつて、中學生には、より以上の期待をせられて居る。特に萩中學校に學ぶ人は、その事に就ては、他の中學生に比して、一層多く期待せられて居るのである。且つ、萩の周圍は、一木一草たりといへども、諸君の修養の材料とならないものはない。諸君は今やこれらを目前に控へて、勉學しつゝあるに反して、天下の青年は、この萩に残された生きた教訓を、僅に、書物に依つて學ぶのみである。諸君の幸福や、實に大なりと謂ふべきである。

松陰先生を始め、其の他明治維新の功臣は、多くは萩の出身である。五六十年の昔には、諸君と同じく萩の山河の下に暮した人であつた。且つこれ等の偉人は、當時非常に腕白であつた。私は嘗て、諸名士の種々の腕白談を聞いたことがあるが、諸君の中にも、五六十年の後に於ては、あれほどの者になつたかといふ程の大偉人が、輩出せらるゝと信じて居る。而もこの萩の天地は、偉人輩出の氣分が備つて居る。これは、過去現在に於ける事實が、證明して居る。而し自ら勉めなければ、かゝる事は全く不可能である。松陰先生は、大なる勲勉家であり、且つ國家を思ふの念は、片時も忘れず、夙夜天下の形勢に通じんことを願ひ、至る所に書物を求められ、これに就いて大に勉強し、又志す所があつたのである。故に天下國家を思ふの念は、日一日と盛んになつて來たので、先生は夭折ではあつたが、國家に盡された所は大である。今日以後といへども、その遺訓は、永く國家に盡す所があるであらう。これを見ると、人間の力は、實に大なるものである。諸君は、かゝる諸先輩の、生きた教訓を見つゝ、勉學せらるゝのは、實に幸福であるといはねばならぬ。又それだけ天下が、萩中學校に期待する所も大であらう。彼は萩中學校の卒業生であると云はれる者は、他中學校の卒業生よりも、一層よく待遇せられて居る。と同様に、私も亦諸君に多大の期待を有して居るのである。何卒、自ら修養を怠らず、國民たるの本分を盡すの覺悟を以て、勉學せられるのが肝要と思ひます。

此度の大戦亂に際して、歐洲の青年は、非常な訓練を受けて、今や戦地に於いて、大なる艱苦を嘗めつゝ戦つて居ります。されば我等は大に熟考を要するのである。彼等歐洲にある青年と同じく、我が青年は、來るべき極東の戦に、彼等と競争せねばならぬ。然るに彼等は大なる訓練を受けて居るから、我國に於ける青年も、よく之を考へて、奮勵しなければならぬ。熟々世界の現状を見るに、露西亞は脆くも敗北して、我國の東洋に於ける地位は、甚だ重大となつたのである。實に、現今の青年の活動すべき時代は、此時を措いて他に求めことは出來ないので、これが、また、我國發展の好時機である。故に萩中學校に於いても、社會の重望を尊重して、松下村塾と同様に、萩中學校をして、天下に重きを爲さしむる爲に、大に、修養勉學に、努力しなければならぬと思ひます。

### 三浦將軍講演要旨

(大正七年四月二十四日明倫館に於て)

○ K 生 筆記

ザット見渡すと、年が甚だ不同であるが、其の多數は若い者であるから、若い者に對して、一つ陳べて見たいと思ふ。何れもこれから世の海を渡る舟で、此の舟が動くのは、一つの磁石によるのである。然らざれば舟は動かぬ。時勢につれて、磁石其の者の形式は、違つて居るが、その功用は違はない。かゝる磁石は、各自に持つて持たねばならぬ。これから世に立つて、色々の事業に盡さ

んとするには、自分の精神ほど大切なものはない。これが磁石なしに、世の荒海を渡り、直ぐ轉覆する。今日以後は、世の中の事は複雑に赴き、風波は激しくなるので、舟は動搖に堪へないのである。此の中に立つには、精神が第一である。精神が確りして、事業をなした人々には、村田清風翁吉田松陰先生など、殆ど枚舉に遑がない。何が來ても動かぬと云ふ精神だけは、世が代つても、變らぬやうにせねばならぬ。何の爲に學問をするか。皆己の精神を確にする爲ではないか。精神が確なつた上で、算盤を取つて商賣もすべし。武器を携へて戰闘にも従事すべしである。短簡に故事を引いて云へば、昔、豊太閤が大阪城を築造する時に、あらゆる天下の諸侯に課役を申付けて、普請をさせたのである。福島正則の持場の隣が、宇佐美某の持場であつた。皆繩張をして、日夜努力して居た所が、或日宇佐美某の部下が、過つて、福島某の持場に大石を轉したので、負傷者が出來た。そこで福島は烈火の如く怒り、馬鹿者がと怒鳴つた。其の聲が餘り大きかつたので、宇佐美の家來眞鍋彌介と云ふ者が、飛び立つて行つて、福島某の胸倉を取り、此の位の事で我主人を馬鹿呼はりをして怒鳴るとは何事だといつて、手に短刀を握つて、今にも刺さんとして居た。此時、傍に居た宇佐美の老臣が、瘡刀を抜いて、彌介出かした。首は拙者が申受けると云つた。かうなつては福島は叶はん。實に危機一髪。此時、福島某の臣が出來て、大小を棄て、雙肌脱いで、地に兩手を突いて、主人の罪ではない、全く拙者が悪つたと過つた。さう云はれて見ると仕様がな。以後注意めされといつて、後に倒れるはど突き飛ばした。と云ふことである。こゝが味の有る所である。福島の家老が手を突いて過るのも忠なら、眞鍋が身命を棄て、福島に飛掛つて行つたのも、共に精忠君を

懐ふの念が迸つたのである。この兩方を相對照して見ると、つまり君に忠と云ふと同じ事になる。昔の人は、重箱に詰められた様な學問はせぬ。皆精神教育をやつて居る。平日の素養がないと狼狽するから、これより進んで行く者は、精神といふことに注意せねばならぬ。精神の修養が出來て居れば、物に決定がつく。疑念が起らぬ。前途長い一代の内には、種々の事が起るが、己の精神だけは、確り持つやうにすることが肝要である。

### 兒玉陸軍中將講演要旨

(大正七年四月二十四日講堂に於て)

小松成一筆記  
松浦孝義筆記

山口縣は、毛利家の御祖先元就公を始め、代々豪傑の御方が御出になつて、又、其の家臣も、名君の下に於て、修養鍛錬したので、有爲の人が多かつた。それ故、朝廷に忠節をお盡しになつた事も、一通りではなかつたから、自然朝廷の御信用を得ることになつた。されば今日に至るまで、他から藩閥藩閥と言はれるのである。此の藩閥と云はれるのは、薩摩と長州ざりである。これは名譽の事と思ふ。藩閥と云ふのは、必ずしも、大きな諸侯だからではなく、仙臺の如き大諸侯もあつた

が、藩閥の中には、はいつて居ないのである。(以下、我長藩の維新史に就き、其の梗概を説かれたれど、之を略す。) 長州藩が、明治維新の大事成就に與つて大に力が有つたのも、忠正公の下に、村田・木戸・廣澤・高杉・山縣・三浦・山田の諸公の如き故には、天下の人物が多がかつたからである。今世界の形勢を察するに、歐洲では、獨逸が、諸國の兵を引受けてやつて居るが、前話した如く、我長州藩が、四境に全國の敵を引受けたときも、丁度獨逸の如く、舉藩一致でやつたのである。御承知の通り、獨逸は、化學・工藝并に諸種の事業が發達して居るので、自活生活をやつて居る。敵を四境に受けた時の長州藩も、自活生活をやつて居た。唯、出羽の秋田藩が、竊に米鹽を下關に持つて來てくれたのみで、取りも直さず今日の獨逸と同一の境遇である。今の獨逸は豪傑が多い。當時の長州も英雄偉人が多がつた。その爲に大事業も成り、藩閥といふ事も此に起り、殿様の名譽にもなつたのである。總理になつた人々は、伊藤・山縣・桂・今の寺内諸公で、殆ど長州出身の人である。お互に肩身が廣い。今日まで發展した長州故、何卒諸君は、そのつもりで、確り後繼をして貰はねばならぬ。諸君より外に後繼者はないのである。よく勉強して豪傑になつてほしい。諸君には、もとより、種々の希望があらう。併し、豪傑は、何れの方面へも現はれる。山縣・桂・寺内諸公は軍人で、伊藤公は文官だ。軍人では政治が出来ぬと云ふことはない。實業家でも、總理大臣になれる。偉い人は、何にでもなれるが、こゝに注意すべきことは、忠孝をどうぞ、生かして用ゐて貰ひたい。死物になつては役に立たぬ。(中略)

元氣は物を覺えて行けば出る。西洋のことも覺えねばならぬ。しかし餘り西洋かふれしてはならん。此邊ではないであらうが、東京邊の小學校の生徒の鞆には、西洋文字で、氏名を書いて居るが、あれは少し西洋がふれがして居りはせんか。ちいつ等は酔ひ切つてわからんだ。それを見て何ともいはん教師も、あんつくたあの大将だ。そこでかう云ふ話がある。日本の某役人が、英國より歸朝せんとするとき、友人に、今から宮内省に伺候して來るといふことを話すと、その友人が云ふには、君は横文字が書けんから、僕が同行して、名前を書いてやらうと云ふた。所が某役は、僕は日本人だから日本字で太々と名前を書くから、そんな心配はいらん。英國人が、日本の宮内省に出頭した時でも、彼等は、自分の名前を、横文字で書くではないか。日本人が、日本字で書くのは、當前だと云ふたといふことだ。諸君も、若し外交官になられたら、日本の元氣を充分出して貰はねばならん。併し善いことは、無論西洋の事を探らねばならん云々

國歩艱難策未成、忘身聊獻野芹誠。才疎萬事迷人望、  
德薄多年背世情。皎月門前誰打石、芳梅籬外渠斬機。  
撫松只託千秋後、有問清風答我名。

清風

左の一篇は、昨年十月、前本縣知事林市藏氏在任中、山縣老公より、同知事に與へられたるものにして、公が、世界の大事に達観し、帝國の前途を深憂せらるゝの結果、青年の覺醒と奮起とを促されたる一大教訓なり。茲に掲げて、修養の資料に供す。善く玩索して、其の眞意の有る所を悟るべきなり。編輯子。

山縣老公書簡

謹啓時下益々御清壯慶賀此事に存候陳者先般田中參謀次長貴管下地方へ旅行相成候由にて、過日面會の節種々其の近情并に貴下御聖察の機微をも承及候殊に青年團に關しても不一方御祝意の趣老生に於ても乍陰喜居候次第にて尙此上共一層の御盡力を希望致候申迄も無之今次の歐州大戰終了の後、全世界に亘り精神上物質上非常なる變化を來し我帝國に於ても直接間接に其の影響を被るべきは明白の事に有之右に就ても將來帝國を擔ひて立つべき青年には確乎たる決心と覺悟とを要すべく今日より豫め指導鍛練するの要は今更多言を要す間數候今次大戰の原因は種々可有之候得共要するに國民民族の競争の結果に外ならず而して此の競争が今次の大戰に依り中歐の

天地に於て解決を告ぐると否とに拘らず次に起るべき競争は必ず東亞の地を中心と致すべきは避くべからざる必至の情勢と被存候尙之を想像するに其の競争は政治上經濟上種々の形式を以て顯れ遂には勢の赴く處(此の所四字を省略す)ふる迄に立至るものと覺悟せざる可からざる義と存候幸に今次の大戰に當りては帝國は遠く交戦の地域を離れ直接の害毒を被ること少しと雖も戦後の競争に關しては直接に波瀾を被り此間若し一步を誤らば邦家千載の悔と可相成實に不容易時期と相考られ候

近世帝國が列強と交渉を有するに至りたる以來五六十年間の事を追懐するに非常なる難局に遭遇せし事一再ならず今日より之を想ふだに尙心膽の寒きを覺ゆる事も有之此の間に處し幸に難局を抜き國運の伸張を見たるは殆ど天祐とも申すべく上に千古の聖帝を仰ぎ下忠誠の國民あり幾多の賢宰良將籌謀宜しきを相成つて此に至りたるは勿論ながら又當時帝國は列強の間に伍し其の地位必しも今日の如く重要ならざりしにも因る可候然るに今日に至りては帝國は事實上諸列強と伍を同くするに至りたるのみならず今後列強が東亞の天地に覇を争ふに當りては、帝國は彼等の爲に重大なる競争者にして又當路の大障害なれば事に當りて困難を感ずる度も昔日に比し幾層倍するは明かなるべく候高木風に當るの喩への如く帝國の地位は戦後に起るべき大風風の衝に當る高樓とも申すべく基礎梁棟は勿論戸障子の末に至まで寸分の弛み無きに非れば能

く此の大風を凌ぎて全きを保つ事能はざるべく之を想へば日采沈憂に堪へざる次第に有之候此の來るべき狂風怒濤の日に帝國の運命を托するものは實に帝國青年の外他にあるべからず候

如御承知今日に於て國運の進展は一二宰相の指導にのみ依るべからず又單に陸海の兵力にのみ頼るべからず國民を擧げ力を盡し所謂上下一統舉國一致の力に倚らざるべからず精神上將た物質上各種の方面に青年努力の要は益々重大に有之候此の意義に於て老生は各地に青年團設置せられ修養に従ふを喜ぶと共に又益々改善進歩して眞に國家に資する所あらん事を希ふ所以に有之候

殊に防長二州は古來勤王の歴史を以て一貫し又近く四境に敵を受け上下を決して苦心慘澹王事に盡したるの事實も有之候得ば其の青年は父祖の遺烈に顧みても卒先して將來帝國擁護の責に任するは正に其の所と存候貴下恰も此の時勢に際し牧民の官として指導誘掖の事に當られ熱心從事せらるゝを聞き欣喜の情に堪へず偏に成果を擧げられん事を切望致候之れ昔に老生が郷土のためにする私情のみにあらず實は帝國一般の前途のために己み難きの宿願に有之候老生齡既に八十を超わ今後帝國の爲に盡すの餘命幾何も無之只々將來ある青年に帝國の前途を依頼するの外無之候老生の眞意御推察被下度候 草々 敬具 (大正七年二月十四日防長新聞第九千九百七十八號所載)

左の一篇は、明木村瀧口吉真氏より、岩田校長に寄せられたるものにして、未だ世に多く知られざる史實なれば、こゝに掲げて郷土史研究の資料に供す。編輯子

強力又十郎の碑

一、所在地。 明木村字市明木川左岸山麓なる、曹洞宗少林山西來寺山門に入る右側、山骨岩はれ、奇岩伏起の間に、建設あり。二百五十年忌に當る年村民協力してこれを建立せりとぞ。

二、石碑

碑石 自然石 高四尺五寸 下横二尺八寸 厚一尺  
臺石 自然石 長四尺 横二尺五寸 厚一尺  
表面題字

同會 古泉城 彦 六  
菅 蓋 又十郎

表面碑文

長州明木村民菅蓋又十郎古泉城彦六皆以膂力鳴矣慶長中築國城之日膏石磨課役之選各爲其長功亦偉矣賞賜飽其意皆曰小民無所當願免居邑之薪樵致都下之顧僅致勞力永頌萬子邑里也其言素實尤其請至今明木村無薪樵之顧者以此也二人死葬于小林山西來禪寺之後山紀功勞於其石昔以告永世云 三、由緒

彦六は、明木村字古泉城(今は字を古戰場と書す)の人。現今其の末裔は、堀帳左衛門なりと。然れども、同地に堀を稱する農家七軒ありて、互に自家の祖先なりといひ、記録なきを以て、其の七家の内、何れの祖先に屬するか詳ならず。又拾那は、明木村字菅蓋の人。當代の戸主野上又十郎は、其の末裔なれども、記録其の他據るべきものなきにより、其の代數等を詳に知るに由なし。彦六又拾那の二人は、慶長九年毛利輝元公山口より萩に移り、築城の際、二人謀役の長に選ばれ、功勞少からざりし賞賜に因り、居村より薪炭を城下に致すものは幕政の時定むる所の徵税を免除せられ(即ち口屋錢)爲めに舉村民が、二人の惠澤に浴したることありきと云ふ。塋穴は、西來禪寺の後山にありと記しあるを以て見れば、碑石は、後に、現在の所に移したるものならん。

四、現在の狀況  
毎年四月、同寺に法華會を開き、之が供養を執行す。  
左の一篇は、安藤教諭の物せられしものにして、栖雲先生の平生を窺ふに足る。依りて讀みて、之を茲に掲載すること、せり。  
(編輯子)

岡本栖雲略傳

岡本栖雲、名は成章、權九郎と稱す。栖雲は其號なり。長門藩

掃し、士氣の振興を計る爲め、防長三萬四千九百六名の精兵、及び、馬匹千三百三十五頭を八隊に分ち、毛利隱岐を總奉行として、大閱兵を行はれし地なり。  
近年村有志者の發起にて、此の遺蹟を永遠に記念せんとして、茲に一基の石碑を建立せり。  
碑は、方一丈、高さ五尺八寸の蓋石に、幅二尺八寸、厚さ一尺五寸、高さ一丈一尺の碑石を建て、表面の題字は、正二位勳二等公爵七利元昭公の筆にして、裏面の記文は、正二位勳一等子爵杉孫七郎氏の撰なり。大正五年の春、工を起し、同六年の夏功を竣ふ。工費千數百圓を要したりとぞ。  
表面題字

賣國囚若無不至

天祥高節成功略

忠臣死義是斯辰

欲學二人爲一人

晋作

士にして、萩の江向に住す。其居を栖雲樓と曰ふ。嘉永安政の際、讀書を以て子弟に教ふ。人と爲り風流自ら適し、士人僧侶の區別なく、皆能く交遊す。故に、客を延きて歡談すること、概、虚日なし。當時、萩の人士の、文筆を以て志想を吐露するもの、同盟結社し、名づけて櫻鳴社と曰ふ。栖雲は、周布麻田、中村白水、來原盛功、佐久間思齊、松島幹峰、北條秋航、上領乾堂、能美雪水、口羽柁山、山縣潮坪、赤川晚翠、等と、皆その社中の友たり。又、他藩より來れる志士も、萩に入れば、必ず栖雲樓を訪問するを以て例とす。明治二年四月二十日、家に病死す。享年五十一歳なり。蓮池院に葬る。門人相謀りて、その遺草を集録して、櫻淚集と曰ふ。栖雲の子弟を教ふるや、之をして多く國史を讀ましむ。吉田松陰の吉日録に之を擧げて、其の教法を稱贊せり。且云ふ。凡、萩中の學究、門弟子の多きこと、岡本氏の右に出づるものなしと。木戸孝允、杉孫七郎、勝田四方藏、兒玉愛二郎、勝門田益、林三介、山田春三、赤川顯介、山縣篤藏、岡部政義、周布公平、高島張輔は、實に其門人なり。栖雲手寫の日本外史、今、萩圖書館に藏す。

羽賀臺の碑

羽賀臺は、阿武郡福川村に在り。天保十四年四月朔日、舊藩主毛利忠正公、村田正風翁の建言を納れ、恬熙の情風を一

天保閱兵之地  
羽賀臺碑陰記  
贈正一位毛利忠正公之襲封也外警漸急國防之事不可一日緩焉然而太平餘習文恬武熙國寶又屬窮乏公乃發憤勵精圖治舉用村田清風翁整理財政振興文武專致力於富強天保十四年四月朔日清風翁建言蒐兵三萬五千大閱武于此地以醒太平迷夢一掃恬熙弊風後平防長二州武威之揚功緒之著實基於此矣頃者有建國之舉因記其梗概以誌後昆  
大正五年十一月

正二位勳一等子爵 杉 孫七郎撰  
正六位勳五等 高嶋 張輔書



通信

戦地だより (九月九日附校友會宛)

會友、陸軍砲兵中尉 山下寛一

(君は本校第七回卒業生なり)

秋冷の候各位の御清榮を祈ると共に將來益々向上健全なる發展を祈り上げ奉り候小官儀第十二師團西伯利亞出兵動員に際し下關部隊も動員を令ぜられ去る八月十八日門司出帆二十二日浦鹽余角港に入港致し爾來前進をなすつゝ居り候露西亞「チエツク」種族を助けて過激レーニン派及び獨逸捕虜軍を成敗する目的第一回の戦争に於て彼等は日本軍なるを知り恐れ遠く退却致し昨今の處「フラゴエレンチエンスク」方向に退却せりとの事我軍は追及して「ハッロフスク」に前進の答に御座候西伯利亞の地たる今迄吾人の思ひ居たりしものとは大差あり今の處氣候も中秋の頃と同じく朝夕涼を覺ゆる位にて想像の如く廣き事は目も覺むるばかり廣き草原にて而も故國のそれと差なく花桔梗女郎花など咲き亂れ居り點々燕麥牧草を栽培する耕地ある次第に候數里の處に山なく月日は草より出でて草に入るてふ古歌も偽ならずして此の如き事あるを覺ゆ申候此の附近の住民は一般に土人種族のものにして文明も進ま

ず農牧を事として服を着たる乞食の如くに御座候又吾人の戦争する敵と友軍の「チエツク」「ソハロツク」種族とは見馴れぬ吾人には見分けつかず敵味方言語不通夜間ならば殊に困難と存ぜられ候阿々先は一般を物して御伺まで早々不備

海兵だより (九月二十日附岩田校長宛)

會友、海軍兵學校生徒 村田美穂

(君は第十八回卒業生なり)

拜啓發暑去り難く候處御變りもこれなく候や私事入學以來相變らず元氣にて日々楽しく暮し居り候間他事ながら御休心下されたく候是迄もなく校内の様子御知らせ致さんと存じ候へども何分忙しくして時間に餘裕これなきと且つ當校にては筆墨を用ひ申さざるとにより在舊今日に至り申候昨日漸く筆墨相求め候に付茲に一書を呈し候次第に御座候何卒失禮の段御海容下されたく候  
諸生等は第二生徒館に起居致し候日課は大略左の如くに御座候

- 午前五時三十分起床。
- 自五時四十五分 體操。
- 自六時 至六時十五分 室内掃除。
- 自六時十五分 至六時三十分 室内點檢。
- 自六時三十分 至七時十五分 銃器手入(火)。
- 自七時十五分 至七時三十分 銃器點檢(水)。

- 七時三十分 定時點檢。七時四十分 課業始。
- 自九時三十五分 課業間の體操。至四時四十五分 課業終。
- 至同 四十五分 課業終。
- 正午 實食。
- 自午後一時十分 課業。
- 至三時十分 訓育(柔道、劍道、體操)
- 至三時十分 訓育(カッター、信號)
- 夕食迄隨時入浴。
- 五時 夕食。
- 六時 溫習始。
- 自七時半 休。
- 至八時 溫習終。
- 九時 就寢用意。
- 九時三十分 巡檢。

午前五時三十分起床喇叭鳴り終るや直に寢具の整頓を爲し服を着け靴を穿ち躰足にて便所に行き洗面を済ませ運動用バンドを着け又躰足にて四十五分まで運動場に行く此時僅か十五分なり而も便所洗面所は列をなし願を追うて用を済する次第に御座候毛布敷の整頓を済せ服を着け終るまでには五分間もかかり候へば生等は顔を洗はすして體操をなすこと殆ど毎日にて候古參生徒は僅か二分位にて寢室を飛び出し候其の敏捷なることは實に驚嘆の外これなく候當校にては萬事躰足式にて命令喇叭等にて動作する時は勿論のこと課業終了後其の他に生徒館前にて解散したる時又は食堂に行く時等は常に躰足にて階段は僅か一段の處にても躰足にて候前述の日課は昨今の日課にて本月九日まで準備教程これあり午前中はカッターと銃隊とにて四時間炎天の下に鍛へられ躰分苦しく御座候ひきされど最早嚴格なる規則的習慣にも馴れ且つ軍規の匂物なるかをも解して以來却つて楽しく相成申候中學時代の

放縱なる生活を回顧して只管馳ち入る次第に御座候生等は未だ動作敏捷に行かざる故僅なる休憩時間は少しぐづぐづすれば便所に行く位にてたち申候古參生徒の散歩する間にも生等は其の日の爲すべき事に追はれ手紙を書く暇すらこれなく候されど生等の將來は殆ど兵學校の成績如何にて定ることなれば全努力を盡す考に御座候先は御知らせまで此の如くに御座候勿々頓首

東京高商より (九月二十五日附本校宛)

會友、東京高等商業學校生徒 竹内眞一

(君は本校第十八回卒業生なり)

東京九段坂上に立つて市街を見下す時は東方に當つて數列の棟を並べた偉大な建築物が見えます、これが私等の學ぶ東京高等商業學校の校舎であります學校の現狀に就いて述べますれば全生徒數は本科課程科合せて一千三百餘名で卒業生は毎年二百五六十名もあります支那より留學生が澤山来て居ります日本語を流暢に話すには驚きます先生は主として本校の先輩で母校の爲に非常に盡力を致して居ます教科書は主として原書を用ゐて居り教科書なきものは筆記であります英語を鍛へることは非常なものですそれで入學試験の時も英語を殊に重要視して居るさうです又體育を重んじ體操を盛んにやらせます

今年入學せる豫科の某生が郷里の友人に宛てた手紙の中の一節に「東京高商の學科の内一番困るのは體操だ」と有つた。うです體操を忽にした中學の卒業生に取つては苦しいのが當然です。修學旅行は毎年春行はれますが、行くときとは各自の勝手です。これが所謂東京高商の醜行と稱するもので、次に高商には一橋會と云ふものがあり、その中の校友會に似て居て創立せられたのは明治三十五年で本校の職員、出資者、及び生徒も組織せられて居ります。その目的は會員の親睦を厚うし體育の隆生を謀り智識の交換と徳性の涵養とを務め以て本校の校風を發揮せんことを期するにあり、その目的を達する爲に編輯部英語部研究部短艇部庭球部柔道部劍道部弓術部に別たれて居ます。毎月一回一橋會雜誌を發行して居てその性質は秋中の校友會雜誌の様なもので、庭球柔道劍道等は盛んに他校と對抗試合を行ひます。但し最も盛んなのは短艇競漕で春秋の二期に行はれ、春期は小會で秋期は大會であります。この時は東京市人四方より集り實に盛大なさうです。選手には第一選手第二選手第三選手及びクラス選手の別があつてH.S.O.の三組に分れて競争しますが、其の時敗は第一選手によつて決定され、競争の日が近づくと毎日隅田川にボートを浮べて練習に餘念なく必勝を期して居ります。高商の中に別に専攻部と云ふ者が有つて卒業後更に商業教育を受けることを得商業教員養成所と云ふ者が有つて商業學校の教員を養成して居ます。終に臨んで一言致しますが東京高商志望の者は Discussion

らず、其故に、學校の第一要求は、先天的此の道に適當したる人物に御座候。即ち、御承知の通り、何事業にも同じ事、身體健全、耐勞力強き者、工業上に趣味を有する者、誠實にして服従心に富む者と考へられ候。工業家の成功は、實地經驗によらざるべからざる故、始めは自ら工夫と伍して、實地作業に従事し、最下級の事務より、其の經驗を積むを要し候。「好、その物の上手なれ」とか申す如く、工業作業には、勞多くして効少なき觀有るを以て、是に興味の要感せられ候、又集合團體多き所にては、規則、長上の命に服従すべきは勿論、己を犠牲にする程の覺悟を要し候。依て學校は吾々に對して、右の性質を修養爲さしめる機盡力致し、教授法に關しても、興趣の異りたる點、多々有之候。從て試験の方法としても、年二三回を以てなされる事なく、平素度々、各自研究せる所を以て考査致され候。

授業時間は、毎日八時より四時迄にて、午前中は主に理論の講義、午後は實習、設計、製圖を行ひ居り候。是の如く、仕事の方至つて多忙を極め候へば、武道部、弓術部、野球部、庭球部等十分なる運動機關有之候へ共、憂念ながら運動には手の届く暇甚だ少なく、割合に振はざる方に御座候。

次に熊本は割合物價が安く、學生生活にはなかなか便なる様考へられ候。殊に百名餘りも收容し得る、自治寮の設ありて、現今下宿料の十七八圓に對し、十二三圓にて済ませ居り候。終りに、本校入學試験は、御承知の通り非常に易く、試験科

及び Hearing を充分練習することが必要であります

### 熊本高工だより (十月十七日附本校生徒宛)

會友、熊本高等工業學校生徒 桑原芳樹

(君は本校第十七回卒業生なり)

金風蕭殺天地の氣定りて、壯士立つの候と相成り候處、諸兄には、嗚かじ英氣滿々、御勉學の事と存じ候。何もがなと筆とりしも、文思今更動かず、不得要領、無味乾燥、徒らに、貴重なる誌上を汚すのみに候。幸に御笑覽を仰ぎ、寸分だに、御参考になるならば、光榮の至りに御座候。

本校は熊本市外、白河の濱に位し、東方阿蘇の連山、西方熊本城を望み、風光明媚、俗を離れたる勉強には極めて好適地にして、前には、校門相對して、第五高等學校も有之候。目下在學の、母校出身生としては、探治三年生福富義介氏、土木三年生駿木長衛氏、同二年生光藤省一氏等ありて、新入の私御陰を蒙り居り候。

本校は、土木科、機械科、探氣冶金科、電氣科一部、電氣科二部に分たれ、電氣一部は化學の研究、二部は機械製作に就いての研究に候。孰れも工業技術者の、養成所にして、工業上必要な學術を教はるは勿論、最も品性涵養に重きを置かれ候。併し、僅か三年間に、十分なる目的を達せん事は、容易な

目は、英語(英文和釋、文法)、數學、物理、化學、用器畫、作文にて、其の内土木、機械科は英、數、物、用、探治科は、英、數、物化に重きを置かる、據存せられ候。

右は模様の極めて大意に御座候へば、御不明の點も、多々有之べしと推察仕り候。其内本校御志望の御方には、出來得る限り御紹介申すべく候へば、御一報下され度候。草々不一、

### 神陵に入りて

會友、第三高等學校生徒 瀧口 純

(君は本校第十八回卒業生なり)

予は延見式を済せて(延見式といふても、組長の先生の前で父の職業とか、將來の目的とか、其の他一般のことを、渡された紙に記入すればよいのだ。勿論寫眞とは引き較べられる)。寄宿舎の生徒監監へ行つて、入舎の手續を済せ、木の札に、予の名の書いてあるのを三つもらつて、教へられた通り、一つの札を支關口にかけた。この札は、外出のとき、裏に赤い字で名が書いてある方を出して置くのだ。それから自修室の入口に、黒地に白壁で、書いた名札をかけて入つて見ると、誰も居ない。可成り空室で、机が椅子と共に、向の方と此方に四つ置いてある。二階にある寢室にも名札をかけた行く、廣さは二十疊敷位で疊だ。一寸赤い名の方を出して外出し、荷

物を持って歸り、自修室に入ると、二三人同室生が来て居る。早速挨拶をする。眼鏡をかけて水を撒いて居るのが室長さんで、「どこでもいここらに席をとつて下さい」といはれた。予は、東側の机の一つを占領した。夜が来て電燈がともる。四つの机に二つの電燈だ。やがて室長さんが、各自紹介をやりませうと云ひ出し、一々出身中學校姓名等を名乗る。北海道の人も居れば、九州も居るが、予より大きい身體をしたものはなかつた。只一般に長い。ほつほつ話を始めたが、八人も丁寧な言葉で、ローカルカラーなごあまり出ない。それだけ何だか氣まつい。間もなく予等新生は、玄關の前で、舎監から舎生として注意すべき事項を聞かされた。主なことは、九時に點檢を行ふ。その時居なかつたものは、歸舎後遅刻簿にその理由を書くべきこと。門限は十一時のこと。消燈も同時刻のこと等であつた。やがて寢に就く。室長さんは、蒲團のまだ來ないものがあるので、自分のを貸して、自分は友達の家泊りに行かれた。何だか寢苦しい。

今日に入學式である。八時前予は新しい白線帽の波にゆられて、講堂に入った。この講堂は、殆ど卒業生諸氏の寄附によつて出來たもので、中々立派である。新生は、東側から行列を作つて、一部甲乙の順序に並ぶと、間もなく、諸先生が入場される。予の心は緊張して來た。今日から白の三線に、櫻を入れた帽子を被るのだと思ふと、嬉しくて堪らないやうだ。他人の顔を見ても、皆いきいきして居る。やがて校長さんが入つて來られた。六十位の、髪の黒い、頭が大きい人である。紋附袴で、片手に杖を持ち、一人の人が側から扶けて居る。あゝ先生は足が悪いのだと皆知つた。併し階段を上つて、講堂の正面に立たれた先生は、杖を棄て、一禮して、勸語を奉讀された。次に先生は訓示を始められ、我が校の標榜せる自由を説かれた。殊に大學卒業者は、専門學校出の者より餘裕があるのは、高校三年間の生活の賜である。高校生活は、偏して居ないからであるといはれた時は、予のドンソとして居た氣持は、更に感激が湧いて、有意義に、長閑に、三年の生活を送りたいものだ、心から考へた。それが終つて、新生總代が宣誓文を朗讀して、新生一同よく其の本分を守るべきを誓ひ、一人一人宣誓簿に、諸先生の前で記名したのである。嗚呼予はかくして遂に自由の國の一人となつた。後で、明治天皇の宸筆を拜し、三年生の自由の宣傳演説があつた。いよいよ制帽を被つて登校する。初めての日のなので、授業方針を、各受持先生が説明される。佛語の○先生の如きは、僕は不意に小試験をやるのが上手ですといはれ、勝が小さくなつた。一週間の四分の三は語學だ。次の日からいよいよ授業が始まると、時間時間の間には、上級生がやつて來て、各運動部や、辯論部に入ることを勧める。スポーツ部は斷つて、柔道部には、時々出ませうと答へた。予は又室長さんから、蹴球をやれと勧められた。蓋し室長さんは、蹴球の選手なのだ。それで到頭引張り込まれた。

文苑

小言五則

特別會員 安藤紀一

一村之秀、不必一縣之秀也。一縣之秀、不必一國之秀也。學生須期爲一國之秀。若夫爲世界之秀、則姑置焉可也。中學生有進上位學校之志、固要定課之外特殊勉修爲之備。然上進之力、必以五年之養爲基。第五年之力、必以四年之養爲礎。苟經五年而無四年之力、不足以爲第五年生、何遑言其上哉。

善學者必善疑。善疑者必善問。善問者必善以衆人爲師。遇農則問田、遇商則問市、察其心之所專其技之所長、就而正焉。衆人且然、况於以教爲務者乎。余嘗謂諸生曰、雖道途門庭之際、一望教師、宜思及其專攻學科、反求其疑義於胸臆以叩之。學問之道、何唯在執書之席哉。聞之而能行者、可謂善學矣。人一能之、己百之。人十能之、己千之。是語照耀千古、令人振作志氣、奮勵弗措、以要乎成功。而今之學生、能知己力之不足與衆同進、正課之外、獨就師補修者有矣。能知學藝之可味、偷暇就圃、博涉而咀嚼、反復而證悟者、蓋有之矣。吾未見之也。

米價暴騰、百物之值從躍。一紙如三紙、一筆如五筆。學生資給之膨脹、未有甚於此時也。余察之、凡諸生之饑寒于自家者、每事與家人相通、或可以儉其日計。加有父兄之訓、粗無浪費之患也。若夫自遠方來寄他人者、食膳之費有一定之約、器具之供無共通之便、不能隨意伸縮。或少慢則費額忽倍、不得不仰出格之給於父兄。苟是之不慮、而唯曰吾家有千金之貯、原有三年之蓄、晏然視財如泉、輕物如芥、此其心既足以空其腹裏其家。雖學成也、何益之有。

科學的思想普及の必要

第五學年 福川秀夫

文明は競争によりて進歩す。見よ古來の大戦争を。盡く其の時代に於ける一新紀元を劃せしにあらすや。予は今大歐洲の大戦亂に於きて、亦其の然るを知るなり。抑獨逸が這般の大艦に於きて、大舉國境に迫りたる列強に對し、よく攻守の實を擧げ、尺寸の地と雖も敵に侵されず、開戦以來四星霜を經し今日に至るまで、毫も屈する色なく、敵ながらも誠に嘆賞すべき行動を取りつゝあるは、何に原因するか。固より四十餘年間修養し來りたる不撓不屈の精神にも依るべけれど、又精銳なる武器の發明に俟つことの大なるを知らざるべからず。換言すれば、科學の顯著なる發達に職由せずんばあらず。

讀つて我國の現状を見よ。一度歐洲の天地、砲煙彈雨の巻と化するや。忽ち各工業上に大恐慌を惹起し、日常必須の物品の缺乏に苦み、盜を見て繩を縛ふが如き失體を敢てせり。之れ彼の獨逸の如く、平時より科學的研究に、熱心なる努力を拂ふ所なかりしが爲に外ならず。此の點は、吾人の深く留意せざるべからざる所なり。凡そ戰爭に参加せる各國の意氣高潮に達するや。其の要求するものは、武器の精銳なり。現今歐洲に於ける武器は、未曾有なる長足の進歩を來したることは明なり。特に航空機、潛航艇に於て其の然るを見る。然るに我國の武器たる、十數年來使用し來りたるものに、多少の改良を加へたるに過ぎず。かゝる状態にあるときは、如何に武名赫々たる我軍と雖も、豈に歐洲列強の敵たるを期し得べけんや。かく觀じ來れば、吾人は、吾國をして、一方化學工業を發展せしむると同時に、他方に於て機械工業を進歩せしめて、彼等に比肩するを得べからしめざるべからず。然らば其の第一歩は如何。他無し。唯我國民に、科學的觀念を普及するにあるのみ。凡そ東洋人の短所は、科學的方面の研究を輕視するの傾あり。然れども現今は世界的なり。他國と尺寸を争ふ時なり。之に加ふるに、國勢の發展は、主として科學的觀念の多少に關係す。これ今次の大戦に於きて、適切に證明せられたる所なり。是に由りて之を觀れば、今の時に當りて、大に科學を發達進歩せしめ、以て社會の文明に貢獻せんことは、吾人青年の國家に忠なる所以の職分なり。努めざるべけんや。

### 時代の誘惑

第五學年 志賀義雄

我こそと、登龍門を目指せる如くの競争者を一蹴し去りて、某校入學の榮冠を贏ち得し友の、一日訪れしことあり。話の末に友の曰く、「卒業後は某汽船會社に入らんと欲す。彼の會社は俸給實與共に多し。要するに俸給多額なる會社に入らざれば損なり」と。我其の言を聞きて愕然たり。而して之を語る友の態度の眞摯なるを見て、更に呆然として言ふ所を知らず。且つ常に彼を畏友として尊敬せる我は、憤懣嫌惡の情益涌して抑ふること能はざりき。嗚呼、純なるべき青年の心に、斯くの如く、拜金思想の蟠れるは、青年の罪が將時世の咎か、我は思ふ。之れ青年の薄弱なる意志、時代の誘惑に魅せられたるものなりと。歐洲の天地戰亂の渦中に投ぜられてより我が國は其の餘澤を蒙り、俄然として國勢膨脹し、從來、惴々焉として、殆んどその荷の重きに堪へ得ざりし商工業界は、勃興の機運に向ひ、所謂成金者流は、一攫千金の夢を實現し得て、金權萬能を發揮し、紛々たる銅臭國內に溢る。この變則的經濟現象を、目の當り親しく見て、眞の福祉に達する道の、餘りに遠にき疲弊せる人々が、動もすれば、刹那の歡樂に憧れの眼を向くるとき、争でか、之に眩惑せざるを得ん。宣なるかな。世人、滔々として、營利社會に走ることをや。されば、國民上下の頭腦に「金即ち力」なる觀念、深刻に喰ひ込

める今日に於ては、國家の健全なる發達を望まむことは、到底期し得べきにあらざるなり。

抑歴史上、常に眼覺めたるは青年なり。青年は史上に活躍する偉大の筆なり。其の動くところ、燦然たる大文字を畫し、其の過ぐるところ、堂々たる大文章を現す。歴史、之が爲に濃厚絢爛の色彩に富む。讀つて、眼を現時の青年の上に轉ぜんか、我等何を以てか、辯護の辭とせん。舉つて、金權を謳歌すること、江漢の東海に朝宗するが如く、人生の究極問題を研究すべき道德的情操は、麻痺し、學問を以て、口を糊する藝なりとす。時代の誘惑に、毅然たる能はざるの證にあらすして何ぞ。戰爭終結の後、戰爭なしとする勿れ。更に恐るべき平和戰來らん。其の時にあたり、醉眼朦朧として、暗中を摸索するが如き、失態を演ずると否とは、即時、覺醒するか、猶、夢路を辿るかに依りて分る。眞に國家を愛する者は、時代の誘惑に抗して、確實なる基礎を据へんかな。

### 夏の晨

第四學年 三好城輔

歐人我國を呼びて、世界の樂園と云ふ。げにや我が神州到處山響に、水流れ、麗歌展く。花匂ふ春、月清き秋、さては、汗流るも夏、衣重ぬる冬、造化は時々刻々趣味と變化とを吾

人の前に示し、枯渴せる頭腦に新生命を與へ、汚濁せる耳目の洗滌につとむ。余性來煙霞風月を好む。暇あれば飄然として出で、飄然として又歸る。豈これ博物標本の採集ならんや。唯自然の大に親み、浩然の氣を養ふにあるのみ。

一日早晨、例の如く手拭腰にし、飄然家を出づ。露にうるはひし涼風吾袂を拂ひ、叢の蛙は余が足音に驚きか、滾々としてそこそこ飛び交ふ。海原は猶眠りたり。山は茫として中腹には朝霧海の如く布きたり。人も覺めず、煙も立たず。唯眠げなる鶉の聲を聞くのみ。丘に鳥群あり、大之れを追ふ事しきりなり。己にして小畑の山の背、俄かに白光の御光さし來り、見る／＼日は山より出づ。日山上に出で、其の金光は初め柔かに、次第に強く、山谷の朝霧を貫きて其の内に滿ち渡れば、白砂一帯木と云はず、草と云はず、砂と云はず、悉くこれ金光に浴し、笑を含まざるなし。遠山は猶ほのかに、麓の谷は未だ朝霧に睡る。己にして日は益々上り麓の雲徐ろに動きて、森現はれ、家見初めぬ。此時日は眼界に滿ちて、家々炊煙起り、晴を喜ぶ鳥雀の聲耳に溢る。眼を上ぐれば十里二十里の遠山まで、東に向ひて朝日を迎へつゝあり。纏て衣を解きて波打際を下り立ち、徐ろに海中に入り左に動き、右に轉じ、或は曲浦を走り、或は砂上に逆立し、或は深呼吸をなし、或は自らその身體を跳めて、其の發達に驚く等、其の快絶、何ぞこれに加ふるものあらんや。げに、市塵にまみれて陋室に籠居し、腐敗せる小説に浮身を賣せる徒の、夢想

だにせざる所ならん。出でて松並木を縫ひ、砂白き濱邊に息ひて、松吹く風の琴瑟を鼓するを聞く。汪々たる海上を望めば、眞帆片帆静かに其の上を滑り、巨巖の隙にかくれ、或は水平線上に滑り行く。波の花雪と散り霞となり、白玉と砕くる汀の方を見れば、此處には三四の兒童等の砂を掘り、水なたへて餘念なく遊べり。日未だ高からざるに此の仙境を脱して歸れば、緑側の風鈴、ゆかしう鳴りて蟬聲しきりなり。

### 現今の航空界

第四學年 赤川 傳

驚くべき近代文明は、實に諸種の科學の進歩發達に寄與する所夥多なり。見よ歐亞の天地を、海に恐るべき潜水艇の活動、陸に毒瓦斯使用の塹壕戰、空飛ぶ航空機の空中戰の如きは、交戦各國が武力の覇を競はんとし、先づ科學力の優劣を争へるものなるを示せり。就中、前世紀に於て空想に過ぎざりし、空中戰の如き長足の進歩は、實に驚嘆すべき所ならずや。彼の慘澹たる煙霧投下、遭遇戰、飛行機の襲撃に對する飛行機の奮闘の如き、いかで筆を以て描き口を以て盡し得んや。げに、此の空想は今や實現せらるるに至り、軍事上將た交通運輸上に、偉大なる効果を齎し、戰略上一大變遷を促すに至れり。蓋し飛行機は、上下左右千變萬化の妙技を、瞬忽に於

て演ぜざるべからざるに、戦前の如き低空飛行のみを以てせんか、忽ち地上よりする熾火の犠牲となり了らん。然るに今や瞬く間に昇降自在、克く五千米突の高空にさへ飛揚し得るが如き發達をなせり。かの支那怪奇の術とさへ稱へられし術返り飛行の如きも、最近に至りては驚くものなく、一逃走法として容易に之れを演ずるなど、實に驚嘆に値す。如此飛行術は則ち一刻と進歩發達し、將に空中を征服せんとするの觀あり。若し夫れ、猛烈にして、而も敏速なる空中戰に於て、馬力強大、装甲堅牢、且遠距離に堪へ得る大型飛行機と、比較的強力にして行動敏敏なる小型飛行機との優劣は定め難く、今も猶ほ疑問研究中なりと謂ふ。

今試に現今戰線に活動せる航空界の實力を見るに、獨逸の有力なる斯界の發達には、流石に沈着なる英國國民も、無頓着なる巴里市民も、心膽を寒うしたり。しかれども英國も五百臺の飛行機を有し、佛國亦流石に飛行先進國の名に恥ぢず。顧みて米國を視へば、近時に於ける斯界の發達革新は、實に目撃すべきものなり。幾萬臺の機體建造に着手し、之れに對する操縦者の養成に努力し、飛行場、及び製作場の建設も亦着々進捗せり。而して此事成就せんか、民間飛行界の發達と相俟ちて、將に世界に冠たらんとす。斯く歐米諸國は航空機の國防上緊要なるを認め、巨額の資を投じ此が進歩發達をはかるに、我航空界の現状を見れば如何に、先進諸國のそれに比し格段の遜色ありて、殆んど隔世の感を禁する能はず。若し軍

國の將來を想像せんか、轉た儼然たらざるを得ず。機數の寡少なるは論を俟たず、設備の小、操縦法の拙劣、寧ろ見越に類す。今如此現状を呈せるは吾人の最も遺憾とする所なり。見よ、最近に於ける墜落頻々たるを。吾人憂國の青年は、益々危懼の念に堪へざらん。惟ふに日月の尙淺きと、經費の少きと相俟ちて、如斯因をなすと雖も、之が後援者たる者の努力を盡すべし。宜しく國防上の見地より大革新を企て、實力を養成すべきは我國の最大急務にして、世界に冠絶せる日本魂を有する神州健兒は、自ら進んで自己の職務に勉勵し、而して斯界の爲め粉骨碎身、以て國家に貢獻し、其の面目を一新し、他方面の發達と相俟ちて國威を世界に發揚し、國家の安寧秩序を致すは、是れ吾々青年の本分ならずや。

### 秋吉鐘乳洞を觀る

第三學年 篠原智雄

七月二十六日未明、秋吉洞穴を見んとて、萩を發す。鹿背峠を越ゆる頃より、ほのぼのと白み初めて、明木村に至れば、天地漸く明かなり。狹霧の間に隱見する樹木等の風景を賞しつゝ行く程に、何時しか雲雀峠も過ぎて、赤郷村に入りぬ。宮馬場なる友人の家を食事了へ、直に其の案内にて景清穴に向ひぬ。穴を出づれば、早正午に近し。急ぎて秋吉に向ひ、

其夜は旅館の一室に樂しき夢を結び、翌早此處を出發して、瀧穴へと急ぎぬ。廣谷に到れば己に入時、此處にて案内者を雇ひ、松明三本を携へて、小徑を辿りつゝ進む事一町許にして、道は俄に數十級の懸崖に絶たれつ。其正面には、巨魁の口を開けるかと思はるゝ大洞穴ありて、入口には懸踏たる瀑布懸れり。是れぞ瀧穴の名有る所以ならむ。傍に危げなる細橋ありて洞内に通せり。先づ龍淵の淺處を徒渉すれば、續きて河原あり。其の盡くる處は長淵にして、舟を備へたり。これより内に入るに隨て、縮血、龍岩、飽岩、廣庭、青天井、高敷橋、花庭、南瓜岩、菖蒲、空堀、百町田、傘屋、穴窟、懸岩、金の釣柱、烏帽子岩、大佛岩、猿、釣鐘岩、等の奇勝噴出し、途の極まる處に地獄と稱する深谷あり。此の諸勝は各崎形の鐘乳岩より成る。然して形よく名に適へり。就中最も壯觀なるは、金の釣柱にして、高さ六丈徑一丈に餘る大鐘乳岩より成る。傘屋には、大小數十の鐘乳岩垂下して、恰も傘屋の天井の如し。此邊は洞内の最廣處にして、高さ三十丈幅十丈に餘る處ありと云ふ。猿は地獄に至る險路にして、鐵鎖に倚りて始めて攀つる事を得。此處より釣鐘岩を右に見て行く事數十間にして、地獄に達す。但此は瀧穴の支路なり。金の釣柱附近より、洞内の川に沿ひて本道を進めば、三十町の深きに入らると云ふ。然れども穴の深さは是に止らず。これより奥は、踏査せる者絶て無しと聞く。地獄より引返して、宵明星、六地藏、開山行場を巡り、洞を出ては十一時に近き頃

なりき。即ち、住復十七則に二時間を費せしなり。其れより歸途に就き、九里の山路を急行して、長き日も暮れんとする六時頃、樂しき旅行の終りを告げぬ。

### 忠烈乃木將軍

第三學年 三好 章

嗚呼、武士道の權化乃木將軍。身は陸軍大將伯爵の榮位に在れども、六十餘年の短かき生涯は、極めて悲壯なるものなりき。遠くは、西南の役に聯隊族を薩摩軍人に奪はれ、近くは、旅順の戦に二萬の子弟を死なしたりき。高潔一徹なる將軍の心中は如何なりしか。天にも地にも代りの求め難き二人の令息を戦死せしめて、國民に申譯せられし如きは、誰れか其苦衷を察して同情の念無限の悲哀を禁するを得んや。唯將軍に就きて注意すべきは、その不遇なりし中にも、明治大帝の御寵遇を辱くせし事なり。將軍が閨々の懷を抱き、秋々としてあじなき月日を送られしは、一に先帝に對し奉る衷情なりしなり。然るに廣き世界に唯一人已の心中を告知へる、この先帝陛下の崩御に遭ひし時、將軍は悲痛はいかゞなりしか。今まで憂き年月を忍びて此の世の中に永らへし希望も目的も、此に至りて終りぬ。將軍の心とする所唯殉死あるのみ。あゝ、生きても死しても、國の爲に武士道の實行を世

に示し世に訓へたりし忠誠は、誰か血涙を以て感ぜざらんや。あゝ、將軍の靈魂は、凝りて護國の神となり、吾が日の本の國を萬古不朽に守護するなるべし。

### 時 間

第二學年 上野 玉市

あゝ尊き時間、世に金錢の尊きを知りて、未だ時間の尊きを知らざるもの多し。費せし金は、復得べき道あれども、一度過ぎ去りし光陰は、再び得る事能はず。されば時間は惜まざるべからず。又正確に守らざるべからず。正確に之を守らざる時は、その損失たゞ己一人のみならず、多くの人をして時間を空費せしむることあり。古より時間に関する格言多し。古語に曰く「時は金なり」と。然り。實に聖賢は寸陰を惜しめり見よかの米國の大統領ワイルソン氏を。氏は幼時家貧しく、常に耕牧に従事せしも、尙餘暇を以つて讀書講學を事とし、歳二十一の頃には既に千卷の書を讀破せりといふ。將た又西洋の英傑ナポレオンの如き、我が二宮尊徳翁の如き、これ等の人々の斯くまで名聲を當時に博し、功を千歳に垂れたるは、是れ皆寸陰を惜み之を忽にせざりし賜に外ならず。況んや社會百般の事物の複雑せる今日に於て、少年たる者、豈分陰を惜まざる可ならんや。

又顧みて世の失敗者を見よ。彼等の多くは皆明日ありと思ふ「心にあだ櫻」をば、夜半の嵐に吹き散らされて、茫然自失せるものに外ならず。實に其の美名を不朽に傳ふると、其の臭名を後世に遺すとは、常に一寸の光陰を重んずると、否とに在り。凡そ分陰を惜み、寸暇を重んじ、奮闘努力するは、勤勉の習慣を養成し、責任を盡し、義務を重んずる所以にして、立身出世の基なり。げにも大切なるは時間なるかな。

### 偶 感

第二學年 玉井 忠彦

一、池中の鯉魚  
驟雨一過草木初めて蘇生するの時、池中の鯉魚亦天與の恵に浴し、悠々自適更に望む所なきが如し。是れ彼等が狹隘なる泉池を以つて天地と心得、世に大川廣池あるを知らざるが爲なり。人にして小成に安じ、切磨琢磨の功を積まずんば、池中の鯉魚と相離る知るべきのみ。

二、白菜

農園の白菜は早天の膏雨を得て、忽ち土を破りて發芽す。恰も陰忍之を久しうし、好機に乗じて驚天動地の働をなす英雄豪傑にも似たり。世の好機を逸し、徒に身の不遇を歎する士

は、又以つて誠とするに足る。

### 三、蜜 蜂

出でては寸暇の時間も惜みて立ち働き、入りては多數團結してよく一王の命に服す。一旦急あれば身を捨てて敵に當り、一擧にして之を撃退す。徒に新思潮に走り我國體を解せざる者宜しく他山の石となすべし。

### 勉強は幸福の基

第一學年 里村 文二

世の中には、日々の生計にさへも困るものがあり、或は、人の下に碌々一生を過すものもある。是等には、種々の事情や原因もあらうが、多くは勉強の足りないため、此の不幸に陥つて居る人も少くはあるまい。凡そ、何事に限らず、如何に天性伶俐な人でも、勉強せずには、立身出世して幸福を受けることは出来ない。又、祖先の遺徳によつて、幸福を享けて居るものでも、勉強しないと、之を維持することが出来るものではない。況や、常人は人一倍勉強しないと、可惜一生を不幸の身の上で畢らねばならぬ。然るに、世の中には、勉強もせずして、成功を夢み、或は、他人の幸福を羨むものがある。何と云ふ甚しい考違ひではないか。されば、人は、徒に安逸遊惰に流れることなく、各其業を勵むがよい。殊に、吾

等學生は、常に光陰を惜んで、學問を始め、技藝を磨き、身の幸福を圖らねばならぬ。

## 夏の海

第一學年 三浦不二夫

夏になれば、誰も海に親しむだらうが、僕は格別だ。際涯もない藍色の海の上を、燕が嬉しげに低く擦れ擦れに、思ひ存分飛ぶのを見ても心地がよい。暑い日盛りには、清らかな海に飛込んで、波に乗り波を滑つて遊ぶのは、實に愉快だ。汀近くには美しい小魚が、平気で泳いでゐる。矛をもつて追つかける人もあるが、なかなか捕れない。蠟燭を採ることは、誰にも出来て面白い。僕は海國男兒だから、海に慣れて置かねばならぬ。照りつける夏の日に煙きつけられて、黒ずんだ皮膚の、二三度剥けるのは、僕の誇とするところである。

## 修學旅行記 (榮紫紀行)

第四學年 瀧口吉繼  
玉木正夫

「首途」不知火の筑紫の極に遊ばんと思ふや久しかりき。由來九州の地は帝國中最古創開の處にもて、軌近諸工業勃興の地

と古人の詠げん如く、筑紫の山々の紫翠、繪の如く、海峽に映し、左は壇の浦の古戰場に接し、情景雨ながら、平家當年の悲劇を語る。かくて午後一時三十分發連絡船にて九州に渡るべく埠頭に急ぐ。

「門司」日本海と太平洋とは距離五丁餘の水道によりて相通す。これ馬關海峡なり。「忽怪潮頭急於前崖門一出是支洋」と山陽の詠ぞし如く、潮流激甚なり。連絡船大瀬戸丸は既に棧橋に待てり。暫くにして牛の吼ゆるが如き汽笛と共に、船は運轉を始め關門海峡を横斷す。門司より汽車にて福岡に向ふ。松原多き豊前の濱、一碧萬頃の青海原、波滑かに春風みちて魂飛ぶの趣あり。人は皆白砂青松とだに云はゞ直ちに須磨を想ひ、赤石を偲べど、此處も亦行く處として、長汀曲浦の眺に非ずば、白砂青松の風光にして、たゞ千鳥通ふ淡路の鳥影なきを恨とするのみ。

「煤煙溼溼」午後三時十五分枝光近くなる頃より、行くて蓋に林立する煙突より吐く煤煙天を蔽ふを見る。これ名にし負ふ枝光製鐵所なり。車中詳細に見るに由なけれど、高く竝び立てる煙突の壯觀、左往右往に奔馳する汽車の列、長く連れる黒ダイヤの堤、孰か吾が目も驚かさざる。汽車は待つこともなく進みて、榮隆夢畝を縫ひ、矮松鬱生する阜丘を過ぎて、四時四十五分箱崎驛に着す。

「箱崎」下車して宮崎宮に參拜す。こゝは應神天皇の胎衣を埋め奉れる神靈の地にして、廟宇壯麗を極めしならんも、白蟻

なり。此を以て九國の山河數百里、名勝史蹟に非ずば煤煙溼々たる工場なり。我等四年級の健兒八十名その名勝を探り、其歴史の影に飽き、併せて研學の實にもせばやと西海の空に志たるは、陽春九十時に子規の音に去らんとする象月の七日なりき。此の日放課後、校長先生よりの訓辭を受け、各々旅行の準備に急ぐ。午後八時金谷祠前を出發する頃には、昨日來の暗雲俄に去り蒼穹の星辰燦として吾等の祖道を祝するに似たり。一行はこれより深夜を冒し、岐坂狹路十里の山道を突破して山口に向へり。談笑の中明木を経て一弁谷にさしかれば谷間の蛙聲たて、旅情先づあはれなり。十二時頃佐々並を過ぎ、程なく一の坂の嶮を越ぬ、明くる八日午前二時半頃山口に着す。中川旅館に待つ事暫し、午前七時十九分一行は遂に車窓の人となり、一聲の汽笛を後に山口を見捨てぬ。かくて景の變り境の移るにつれて、何時しか下の關に着す。時に十一時二十二分。

「下の關」山陽ホテルの高窓に驚かされつゝ進む程に、我等は先聲中島氏の案内にて一丘陵に導かる。これ龜山神社にて當地第一の展望地なり。次で清國驛和使一行の旅館たりし引接寺、講和談判場たりし春帆樓等に至りて、二十七八年役の昔を偲ぶ。次で安徳天皇阿彌陀寺の御陵を拜し奉る。此に接して、同天皇を齋き祀れる、官幣神社赤間宮あり。又其の左側には、教盛知盛などを拜れる、所謂平家七盛の墓あり。此の邊前は直に觀の海に臨みて、門司と相對し、「隔水青山是鎮面」

徒に勢を逞しうし、今は改築中なれば眼のあたり神靈に接する術もなく、板壁を隔て、僅に拜し奉る。醍醐天皇の宸筆、敵國降伏の四大字を刻せる扁額は、北海に向つて立つ華表の欄間にありて仰望自ら襟を正さしむ。境内清酒老松蒼翠の外又一塵の留むるものなし。

「博多の宿」午後五時五十二分再び車窓の人となり松嶺六百年の夢を吹き破る處、巖々たる洋館をならべて天際に聳ゆる九州大學を右に眺めつゝ六時六分博多に着す。旅館高島屋は停車場より程遠からぬ處にありき。投宿後湯に終日の勞を醫する餘裕もなく、蒼室として夕雨を了へ、共進會夜景場に至る。數知れぬイルミチーション、數千の電燈、宏壯なる建築物孰れか話の種ならぬ。十時も過ぐる頃宿に歸り直ちに心地よき夢路に入りぬ。明くれば五月九日の空は曇りて、點滴の音四響を繞りて轉た旅居のうら寂しさを思ひき。

「共進會、化學工業博覽會」午前七時三十分宿を出て共進會場に至る。待つ事暫にして開會の時も來れば一同雪崩をうちて第一會場に入り、陳列物産の多きに感ず。次で朝鮮物産陳列場に至り新領土の風物に接し、轉じて桶の香高き齋齋館に至れば、熱帯の物もて滿され、さながら彼の地に遊ぶが如き心地ぞせらる。更に電氣館に行く。近世の發達に關る電氣工業的物産集めて又燦々なし。此の外古武器展覽會、美術展覽會など見るべきもの、數々なれど、急ぐ旅なれば心ゆくばかり止る事も叶はで、西公園なる化學工業博覽會に向ふ途福岡

城址を見る。城は黒田氏五十二萬石の府城にして、殘濠深く深碧を湛へ、壘壁高くして三百餘歳の苔をむすべり。愈々博覽會場に入る繞近工業の玉と謳はる化學工藝品の華麗精緻なるを見て眼を驚かし、百聞は一見に如かずなご今更の如き悟り顔して出で行き、電車にて博多驛に急ぐ。

「太宰府」午後十二時五十分博多驛發列車にて太宰府に向ふ。折しも瀧天の階雲低く垂れて、雨脚愈々繁くなれり。汽車は夢溪滲漉として榮黄と相映する筑紫の平野を南に過ぎ行きて二日市に着す。それより輕便鐵道に箱詰となりて、午後一時四十五分太宰府の街に入る。一種暗鬱なる色彩を帯べる町を見て、此の地が往時西の都と稱へられて、太宰府廳の置かれし地かと轉た感慨無量、今更の如く時世の變遷の甚しきに驚きたり。愈々太宰府神社境内に入り、神池に架せる太鼓橋二つ渡れば樓門あり、樓門より數歩にして神殿あり、金碧莊嚴人目を眩せしむ。神鈴の綱とりて靜かに響く鈴の音に公が當年の襟懷を追憶して、暗涙の睫に浮ぶを覺ゆ。世に名ある飛梅といふは社の右側に在り社後に數ならぶ攝社末社など賽し神苑の地に入る。瀟洒たる亭榭梅樹の間に散見し、雲のなく一二月の頃はいかばかりならんと眺ゆかしき境なり。源氏物語に清水山として見ゆたる觀世音寺、往時本朝三戒壇の一つとして堂塔伽藍壯麗を極めし戒壇院、千年の歴史を空しく敗瓦殘礎の間に封する都府樓の趾など、程遠からぬ處にありと聞けども風伯雨師に禍せられて、遂に訪づることの出来ざり

しぞ恨みなる。再び輕便鐵道にて二日市に來り更に門司行列車にて博多に向ふ。微雨車窓に入り、天拜山の影雨中に霞めり。難雨が限を過ぎて程な、博多に着す。

「再度の博多」午後四時三十分宿に歸り、夕餉を了へ三三五五出で行くもあり、直ちに長閑なる眠に就くもあり。明くれば五月十日空晴れ渡りたり。東公園を見んと宿を出で案内知らぬ道を迎りて、辛くも東公園に赴く。蓋かに松林を辿りて立正安國の四字餅かに讀まるゝ高臺の上、那頂繡衣の巨人北海を覗んで立てり紫雲兩手に輝き法華一乘の旨を得、胸に溢るる歌々たる信念の力を以て、救世の餌うち揮ひし日蓮上人の雄姿眞に生けるが如し。次で龜山上皇の銅像を拜し奉る衣冠東帯の御姿いと神々しくわはします。あはれ國の内如何に浪臥立ち騒げばとて、十香の玉體もて國難にはらんとよて祈らせ給ひし大御心の泰けなきに、盡忠報國の念油然として胸に躍るを覺ゆ。

「歸途」午前八時五十六分身を一聯の汽車に托し、千代の松原を左に眺めつつ博多を見捨つれば、箱崎香椎など四邊の光景は移りかはりて車はただ走りに走り行き何時しか門司に着す。直ちに連絡船にて下の關埠頭に上陸。更に上り列車に投じ短亭長驛の幾つかを過ぎて山口に着す。時に午後三時五十四分。「山口の一夜」着後直ちに山口高商在學中の先輩諸氏の案内にて、高商内商品陳列場を參觀す。共進會の金裝銀飾の美なしと雖も、此處にも亦珍品の夥多あるありて、吾等の見聞を擴

む。夜は中川旅館にて先輩諸兄、吾等の勞を慰する爲め茶話會を催さる。或ひは懷舊に或は演藝に、各々欲する所を行ふこと一時間餘、遂に本校開校紀念歌を合唱して別る。

「歸萩」旅行の最終日五月十一日午前六時半山口を發し、常に見馴れし道とて途中見る事もなく、山寺の晚鐘鳴り響く午後六時といふに、校長榎野兩先生の出迎を泰うし、無事金谷祠

前に着し一同解散す。

ああ四日の旅行足跡の及ぶ處僅に九州の一部にして、耶馬の勝、阿蘇の峯などの名勝史蹟を殘したるは、遺憾は遺憾なれど、日本第一の工業地北九州の野に於て受けし我等が印象は、永遠に吾等が腦裡を去る事なかるべし。終に臨み引率教員史、清水、石井、中村の四先生の勞を謝す。

離<sup>レ</sup>地<sup>ニ</sup>而<sup>シ</sup>無<sup>シ</sup>人<sup>ヲ</sup>

離<sup>レ</sup>人<sup>ヲ</sup>而<sup>シ</sup>無<sup>シ</sup>事<sup>ヲ</sup>

故<sup>ニ</sup>欲<sup>ス</sup>論<sup>ニ</sup>人<sup>ノ</sup>事<sup>ヲ</sup>

先<sup>ニ</sup>觀<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>地<sup>ノ</sup>理<sup>ニ</sup>

松 陰



## PHYSICS AND CHEMISTRY

By Kwan Yoshida, V; A.

Since the abolition of the national isolation policy, many people of wisdom and learning went abroad to learn from the people there. Yet I suppose that the first and deepest impression they received was the application of physics and chemistry to their industry. It can not be too much valued in any age. Look around you for example. Nearly all that you use in daily life is the result of well applied physics and chemistry. Even a flying machine, which has in a manner triumphed over the aerial world, is nothing but the result of their being wisely applied. If it were not for the aid of them, we could never hope for such development of the industrial arts

as it is to-day. It is not too much to say that civilization in the twentieth century is the gift of physics and chemistry.

Now it goes without saying that we must be eager to cultivate the idea on physics and chemistry among our people. How few of us have fully understood the importance of them! Even some learned men seem to believe as if their argument on science were futile. Figuratively speaking, they are giving up their profits of their own accord. But what is the present condition of our country? We are now in distress as the prices of commodities have greatly risen. In other words, we are suffering from the shortage of commodities, especially those of chemicals, which we had been getting from abroad before the war. For a country, nothing is more disgraceful than to confess such a state of things. We are determined to meet the want with better articles than those which we have hitherto bought from abroad.

Thus we students must prepare ourselves to satisfy such demands some day. So we must not take to novels or stories of wild adventures, but read works on machine, electricity, and chemistry that we might master them. Besides, it would be impossible to overestimate the importance of scientific training for the wise conduct of life. In life, there is in any age a spirit of the age - - which has some latent influence - - that encourages the production of some great work. The idea about physics and chemistry would be and should be the spirit of the twentieth century. Arise, then, young men of the Land of the Rising Sun! Be not given to shallow ideas or popular notions! Bear in mind that, "Success is doubtful unless one is entirely devoted to one's pursuit", and be earnest in applying themselves to physics and chemistry. And thus we should reap the final glory and satisfaction of having quickened the development

of japan's resources and made her the foremost power of the world, not in armament alone, but in financial strength as well.

## The Current of Time

By Kuroji Hirata, V. A.

The current of time runs as fast as a stream. Five years have drifted so quickly since I was admitted in the list of the Hagi Middle School. My life therein, these five years, has been a delightful dream when looked back. The school has been a paradise to me. Oh, how happy it was to lie down with comrades conversing under the leafy poplar-trees that afforded a cool shade in the school grounds. How pleasant the boating was on the Abu River, blue and calm. How sad I am now that I must awake from this happy dream. I do not wish to go. No, I do not wish to leave

our dear school. Would that I could stay longer in this paradise and continue the delightful dream.

None but loves the past. See, how often the men of Heike carried their longings back to their past prosperity, when they were defeated at Ichinotani, and chased farther and farther to the south until they perished like foams in the sea of Dan-no-Ura, appealing to the posterity for compassion.

When the young and handsome warrior played on a flute known by the name of Aoba, thinking of the capital, the very echo of it deeply went to the hearts of all the soldiers. One of the officers, unable to control his grief, returned to the capital in the night walking on the dewy path.

May I not stay in the paradise any longer and enjoy the happy dreams? But to my grief, the current of time carries me on and on too far away with the fastest possible speed. Where shall I be drifted in the end? Only gods know. The sky seems clearer to-night, even arched

higher; stars twinkle brighter than ever, but more lonely.

Looking thus up the silent sky from the balustrade upstairs, I could not but feel as if I were wandering in some remote corner of the universe all alone. I could not forbid my tears to flow, when tepid wind gently caressed me as if mother console me when I am sad. At last I took away my eyes from the sky and looked over the sea, where a few fishing-fires were seen flickering among the waves.

## FROM MY DIARY

By Hikogunna Sugi, V; B.

August 25th. Fine.

I got up at six. How glad I was to find that it was fine to-day! At ten Mr. Iseya came to my home to take us to Nara as brother told him

yesterday, so we started at once by car. Me changed car for Nara at Kamihon-machi. Soon the car carried us to Hiraoka. We left the car here to go to worship at the famous Hiraoka shrine which is a very ancient one. Having finished our visit there, we took a car again, which soon entered the tunnel of Ikomayama. Oh, what a long tunnel it was -- it took us 15 minutes to run through. I have never seen such a long one before.

It was just 12 when we arrived at Nara. First of all, My. Iseya took us to the Sarusawa Pond. I found many deer strolling about under the verdant willow-trees near the pond. Then we visited the kasuga shrine, going through under the old trees that made the sight more hollow.

In the yard of the shrine, a good many stone lanterns stood in a row on each side of the road. Next we went to the Nigatsudo, a temple dedicated to Kannon, and on the right side stands

Mikasayama, which is known for its fine shape and for the immortal poem of Abe-no-Nakamaro. Then Iseya led us to the Daibutsuden. Of course, it was very large, but we were not startled at all, for it did not meet our anticipations. Then we entered the Nara Imperial Museum in which we saw so many relics.

There were too many of them for us to count and examine with due attention.

As it was threatening to rain, when we went out, we hurried to the station. But, to my regret, we could not go to the Horyuji temple, as we missed the train. However, we must be grateful none the less for that because we have got a great deal of knowledge through brother's kindness. We got home at six. p. m.

## SELF-CONTROL

By Takayoshi Matsuura, V; B.

In order to succeed in cultivating virtue and other good traits, it is necessary to have self-control. Man, of course, has feelings and desires for food, honour, prosperity and pleasure. But if he does not control them properly and can not withstand divers temptations, surely he will injure his health and make himself mean and poor and lose all his reputation, and finally he shall be given up as a hopeless stuff by the public.

A man who has self-control is like a carriage which has brakes. A carriage accommodated with brakes assures safety for the riders. A man of self-control does not stray away from the path of righteousness. He does not show his feelings in his face and is not liable to be given over to avarice.

If we could analyze the causes of all the failures in the world, we should find that the loss of self-control had more to do with these failures than

that of anything else. There is no loss so great as that of self-command; for, when this is cultivated, there is nothing that we can not accomplish.

Hence it follows that those who have most moved the world, have not been so much men of genius, as men of self-control, though their abilities are not so great.

Oyomei, the distinguished Chinese scholar, once said of the difficulty of controlling the self-interest: "It is easy to break an insurgent in the mountain, but it is very difficult to break that in the mind."

This is really true. Man is to the temptations what the fly is to the stinking objects. In the world, those persons who have yielded to temptations for the loss of self-control is too numerous to mention. But when you encounter difficulties, try, and bear the pain, and then you will be able to take a part of successful men. The youth who wishes to do something in the future must try

to his best to cultivate the virtue of self-control.

## WAR USELESS?

By Yoshio Yajima, 4: A.

Some people are of opinion that war is cruel and useless. Yes, they are right, but not to the full sense of the word "right." Suppose we are not allowed to fight against our obtrusive enemy, the national dignity of our country will be impaired and the national welfare and happiness will be at stake, and the consequence will be far more cruel and painful than the war itself. Convenience generally accompanies danger; likewise in securing peace war itself, sometimes, is unavoidable. There are some who advocate the socialism and say that the war is injurious, at the same time they take the part of the poor and are disputing against the rich. It means that they are fighting

for the poor. If the moral condition of the world should come up to our ideal standard, war should be quite useless. But the condition of the world as it is, it is easy to speak of peace, while its realization is entirely out of the question. So it would be wise for us to prepare for any emergency. Of course, war should never be courted, but when we are compelled to take arms by our enemy, we must stand sternly against them and be ready to sacrifice ourselves for our common cause. We must not fight for mere profits, but for peace and justice.

As I have said, war is sometimes unavoidable. The struggle for existence is nothing but a wan of mental ability instead of arms. The progress of human race is sped by the ever aspiring struggle. Japan has fought against China and Russia, and is now fighting against Germany. Our country has taken possession of Formosa and other territories, it is true, but she has never fought for her profit.

they cover hills, fields, and banks, and look as if they were the clouds or haze hanging over them. But take up and examine one of those petals and you will find it is only a little plain thing. If we compare it with a petal of the rose or peony, it is much inferior to them in beauty as well as in size. However, in the pretty sight as a whole, a rose or peony is no match for the cherry-blossoms.

Now let us examine a saw. You see it has so many teeth. If only one of them is out of order, we can not use it with due efficiency. It works harmoniously that we may cut even big trees at our will.

The victory in a war, which every country fights at the risk of lives and property of her people, solely depends upon the virtue of the national unanimity. Even if there are a number of brave men among the people, they can do little or nothing at the battles of these days by themselves. To win a battle all the rank and file must move in unanimous

cooperation. The degree of harmonious combination in a society is closely proportioned to the merit of its leader. The leader of great ability makes the party an effective one, while a poor commander makes it an invalid one.

The more ingenious is the machine, the more necessary is the harmonious cooperation of its particles, just as the society needs the friendly tie in perfect union as the civilization advances. In future it would be impossible for us to accomplish anything without being strongly united. If so, we young men must act with one accord and not be lured by the promise of immediate gain, but try to win the final victory in the coming peaceful war of all the spheres of activity.

\* \* \* \* \*

but only for peace and justice. Her sole aim was to maintain the peace and integrity of the Far East.

Consider, again, the great war in Europe. Some of our fellowcountrymen are also taking an active part at the European seat of the war. The world war is the greatest one that has ever been recorded in human history, and all the great powers have been involved in it. All kinds of arms and devices conceivable are used at the front. Aircrafts and asphyxiating gases are among the newly introduced means of war. They were not in use in the Russo-Japanese War only ten years ago.

The present war has resulted not only in the reform of arms and other means of war, but also in the change in the public sentiment. We must not observe the war superficially, lest we should overlook many instructions it gives us. The late General Yamaji, who distinguished himself in the China-Japan War, once expressed his thought that

a war like that --- the war between Japan and China --- would take place every ten years. This paradoxical opinion means that if there should be nowar and the world go on in peace, all the nations would be habituated to peace and tranquillity, and lose the sense of prudence and competition, and finally go headlong on to ruin. On the other hand, if we should have war every ten years the mind of people would become alert and animated to keep them from their ignominious fate. Thus, follows my conclusion that war may sometimes be the best safeguard for a country.

### HARMONIOUS COOPERATION

By Yoshisuke Abe, 4 : B.

There is nothing more effective and more powerful in doing anything than harmonious cooperation. When petals of the cherry-blossom come together,

(自大正六年十一月  
至大正七年十月)

山口縣體育獎勵會記事

十二月二十五日、縣立山口中學校に於て、第九回山口縣體育獎勵會開催せらる。本校より出演せし選手は左の如し。  
劍道部 山本忠之。阿武二郎。小方皓。井町敏正。鷺海 一。磯部好人。藤原敏男。石井直太。柔道部 高原啓介。西水彰治。花田好定。見玉三郎。金子重忠。伊藤敏三。大谷三期。阿武 莊。當日此等の選手は、横溢せる元氣と、熟練せる妙技とを凝ひ、正々堂々と闘ひ、大に名聲を發揚せり。就中劍道部に於ては、山本、小方、鷺海、石井の諸君、柔道部に於ては、花田、金子、西永、大谷、阿武の諸君、何れも成績佳真なりき。

辯論部記事

秋季辯論大會(大正六年度)十一月三十日、午前十時より、秋季辯論大會を講堂に於て開き、午後四時に至りて終了す。辯士は、流石に、一騎當千の荒武者のみなれば、其の説く所、其の論する所、活氣横溢して、大に傾聴に値すべきものあり。

- 二十一、My Native Town 四ノ二 志賀 芳雄
  - 二十二、アブラハムリン (二等賞) 一ノ一 吉田 博
  - 二十三、カンの少年時代 (三等賞) 五ノ二 小方 皓
  - 二十四、The Fox and the crow (三等賞) 二ノ一 富田 正次
  - 二十五、吾等の目的 (一等賞) 五ノ一 花田 好定
  - 二十六、Choice of Companions (二等賞) 五ノ一 田村 春秋
  - 二十七、テモステチスの傳を讀む 四ノ二 宮國 則義
  - 二十八、闇の征服 清水 先生
  - 二十九、閉會の辭 部長 木田 先生
- 春季辯論大會(大正七年)度停滯して居る水は腐る。毎年、同じ様なことを繰り返す辯論會し、彌次氣分と、倦怠喧騒で充ちて居た。けれども、此の度は、幾分か舊套を擱置した様だ。辯士は眞摯になつた。堂内は辯士に忠實で靜肅であつた。しかし、前例に見ない討論會を創めた。これが、又、非常に、當日の色彩を華かにした。大體が、完璧には、今、一步の覺悟を要する。
- 六月十九日午前十時半開會。午後四時閉會。本日のプログラム左の如し。
- 一、開會の辭 部長 清水 先生
  - 二、物價騰貴 三 天野 敏介
  - 三、單語の研究 五 大深 安治
  - 四、岩崎彌太郎と其意氣 (三等賞) 二 野村 龍介
  - 五、孝行 一 繩田 寛悟

儘に、從來よりも、一段の進境を覺わたり。冀くは、此等の辯士よ。益々自重修養して、我部の爲め、奮勵努力せられんことを。今左に當日のプログラムを掲ぐ。

- 一、開會の辭 部長 木田 先生
- 二、私の氣焔 二ノ一 大橋 璋
- 三、George Washington 二ノ二 村田 春二
- 四、カルチエアー (二等賞) 五ノ一 金子 重應
- 五、Sir Isaac Newton (二等賞) 四ノ一 石田 藤一
- 六、富家の若旦那 (三等賞) 五ノ一 田中 明三
- 七、An Idle Boy 一ノ一 山根 真一
- 八、國家に望まざる者 三ノ二 市川 直尚
- 九、The Timid Boy 二ノ二 山縣 政
- 十、歳晚と學生 二ノ一 宮内 謙吉
- 十一、The Story of Troy 三ノ二 尾木 忠夫
- 十二、牛 熟 一ノ一 宮國 秀彦
- 十三、The Four Seasons (三等賞) 一ノ三 伊藤喜兵衛
- 十四、which is the Most Useful? 二ノ二 原 吉雄
- 十五、萩の四方の景色に對して 一ノ三 三好 芳亮
- 十六、A Canary in the Cage (三等賞) 一ノ二 野村 龍介
- 十七、What is the prince 三ノ二 赤川 傳
- 十八、萩の歴史を顧みて (三等賞) 五ノ一 中村 博
- 十九、Ships and Boats (二等賞) 三ノ一 藤井 幸雄
- 二十、中等社會の國民 二ノ一 天野 敏介

- 六、鈴の岩(英、暗誦) (三等賞) 四 金子 四郎
- 七、親馬鹿子外道 四 世良 信一
- 八、諸込主義と消化主義 一 服部達太郎
- 九、舌の力 五 宮國 則義
- 一〇、コロンプス(英、暗誦) 三 富田 正次
- 一一、須磨の嵐(朗讀) 二 伊藤喜兵衛
- 一二、滿腹論 (二等賞) 五 高野 芳光
- 一三、フランクリン、英、暗誦 (二等賞) 三 岸田 隆吉
- 一四、借問す 三 宮内 謙吉
- 一五、都會生活と田舎生活(討論) 三 五年級
- 一六、蟹 公 一 島居 勝
- 一七、夏 (英、暗誦) (三等賞) 二 堀 豐治
- 一八、物と思ひやう (三等賞) 一 河崎 院
- 一九、何事も精神 (二等賞) 二 高田 真雄
- 二〇、國民の理化的觀念と國家の盛衰 (二等賞) 五 井上 盛義
- 二一、鹿と獵夫(英暗誦) 二 原 吉雄
- 二二、腹の人 (三等賞) 一 高野 朝光
- 二三、征服の氣象 (三等賞) 四 瀧口 吉繼
- 二四、體は大なれ 一 山根 芳雄
- 二五、朋友の選擇(英、暗誦) 五 飯塚 正規
- 二六、時局と吾人の覺悟 (二等賞) 二 吉田 博
- 二七、不正 (三等賞) 五 河村久三郎
- 二八、九州方面修學旅行談 四 品川 哲郎

猶此外、午前に田部先生の隨筆朗讀、午後川井先生の演説（小事に忠實なれ）ありたり。

天野君、物價騰貴を傍觀せずして、この刺戟を得よと論ず。大深君、所論得る所少からず。野村君、一堂の氣を吞む。口調早きに失せしを惜む。堀田君、言辭稍野卑、今少し眞摯なられよ。金子君、發音流暢敬服の至。世良君、例引き得て妙なりしも、論旨徹底せず。服部君、論旨一貫せず、一層の練習を望む。宮國君、悠然たり。併し相變らすの早口切に惜む。富田君、句毎に切れるが残念。練習を望む。伊藤君、音吐朗々抑揚適當上乘なり。高羅君、滑腹をあらゆる方面に當て嵌めて不可を逃ぶ。岸田君、稍流暢奮勵一步を進めよ。宮内君、病氣の故か先年の佛見せず。討論會、議論續出し、兩派相追ひ、舌戦火光を散らして、誠に、盛會を極めた。島居君、實物持參の説明、珍奇に走りたる嫌あり。堀君、タイトルの如く發音清亮。河崎君、一年生としては、上出来、將來を頼む。高田君、君の意氣受すべし。例題所を得たり。語調急なるは惜しむべし。井上君、熱心にして落着ける、君の特長。原、英語スピーカー、兎角調子早に落るに、最ゆるやかなりしは上乘。高羅朝光君、照度可。瀧口君、意氣の人、抑揚力あり、感歎詞を使用すること多きは疵。山根君、狂犬に拘泥して、正論を失す。再考を要す。飯塚君、初陣として態度發音共に可。吉田君、我部一方の雄幸に努力せられよ。河村君、月旦の評、峻烈適切、包藏の意深し。品川君、滑稽十分に頗る解

(三) 第四中隊 十一分四秒  
第三中隊 十二分十三秒

(石田藤一記)

### 野球部記事

第一回。六月十日第一中隊第二中隊の競技行はる。第二中隊は、初より意氣振はず、常に第一中隊の爲に制せられしかば、中途より衰運を挽回せんと焦慮したれども、遂に其の効なく、第一中隊十四對第二中隊十三。僅か一點の差のレコードを残せり。  
第二回。六月十五日、第三中隊對第四中隊の試合舉行せらる。應援の響天を衝き、選手の元氣亦大に見るべきものあり。成績第四中隊二十二對第三中隊十二。  
第三回。六月二十日、愈第一中隊對第四中隊の決勝試合舉行せらる。第一中隊は、初は意氣振はざりしが、中途より漸く盛り返したれど、動かざること泰山の如き第四中隊の態度と、其の激しき攻撃とに對しては、至る所にて失敗せり。最大名譽の月桂冠は、終に第四中隊の頭上に落ち、チャンピオンフラケの懸る所、萬歳の聲は天地を動しぬ。八對六のリザルトにて首尾よく終了せり。

(T.N.生記)

けり。

### 漕艇部記事

五月二十七日、海軍記念日をトし、例年の如く、我が部は、漕艇大會を、橋本河に開けり。此の日、天氣晴朗にして、一點の曇翳なく、風靜に、波穩にして、恰好の漕艇日和なりき。午前十一時開始。競技は豫定の順序を以て進行せしか、中にも、最も人の注意を引けるは、云ふまでもなく中隊選手競争なり。最初は、第三第一兩中隊の對抗にして、四十八秒の差を以て、第三中隊の勝となれり。次は、第二中隊對第四中隊にして、一分二十二秒の差を生じて、第三中隊の勝利に歸しぬ。最後は、前に雌雄を決せる各勝利者の競争なれば、兩者の元氣前に倍せり。其の成敗は、中隊の名譽に大關係を及ぼせば、隊附者の應援も一方ならず。互に奮戦激闘の末、二十三秒の差を以て、月桂冠は、終に第四中隊の頭上に落ちぬ。同隊の得意想ふべし。職員競争、來賓競争等も滞りなく終了し、萬歳聲裡に無事解散せしは、午後七時二十四分なりき。左に當日のレコードを掲ぐ

中隊名	經過時間	等級
(一) 第三中隊	十一分五十二秒	二一
(一) 第一中隊	十二分四十秒	二一
(二) 第四中隊	十一分三十八秒	二一
(二) 第二中隊	十三分	二一

### 劍道部記事

六月二十七日。我が劍道部は、東先生の審判の下に。春季劍道大會を舉行せり、今や我部は、順風に帆をあげて進む舟の如く、進歩の著しきものあり、當日は演武者一般、日頃に比して元氣旺盛に、禮節の正整なりしは誠に嘉すべし。然れども尙未だ是を以て満足すべきに非ず、蓋し武道は、精神を本とし、技術を末とす、故に其の本を忘れて徒に其の本を趁ふべからず。諸君は今日の如き晴の場所のみならず、能く平素を慎みて、將來我校の劍道をして、縣下否全國に覇たらしむべき様努力すべし、之れ余の切望して已まざる所なり。左に當日の妄評を試む。  
林君、先頭第一の劍能く強者三人を倒す。仙崎君、平素に比して振はざりしは惜むべし。原君、技術元氣共にすべし。中村安藤兩君、の仕合は見事なりき。小野君、元氣よく敵を倒す。田中兼田兩君の仕合は實に天晴なるものなりき。篠原淺野兩君、共に技に見るべきものあり。有吉君、體力技術共に優る。師井君、強將有吉君を敗りしかど、敢へなく熊井君に倒さる。兩君共に練習すべし。玉井平田兩君、共に體力元氣技術に見るべきものあり。山本松本兩君、近頃振はざるは何故か益々奮勵せられよ。守田君、元氣よく進退よし。林繁君、長足の進歩には誰も一驚を喫せり。岡村君、體力技術共に級中の傑たり。有福君、平素の鍛錬、よく大強岡村君を敗る。佐々木

君、よく強敵五名を抜く。堀君、人をして驚嘆せしむべき手腕あり。井本君、よく強將戸倉君を倒し勇將天野君を破る。世真君、技術傾に進歩を覺ゆ。松村君都野君共に太刀筋實に善し。長嶺君、將來我校の覇たるべし。河上君、長足の進歩實に驚くべし。下田君、元氣と十八番の剛は感服するに堪へたり。石井君、沈着せる態度は、思ふに君が精神修養の功ならん。磯部君、敗れしは時否なりしが爲か、未だ必しも技の劣りたるにあらず。富海君、よく老將長嶺君を倒す。我部は君に期待する所多し。益々勉められよ。

十月三十日午前十時より、秋季柔道部大會を開催し、午後三時終了す。詳細は次號に譲る。(井町敏正記す)

### 柔道部記事

六月廿七日。午前十時より、春季柔道大會を開き、午後三時閉會す。本日は、演武者の元氣旺盛にして、よく得意の技を振ひ、確かに平素に於ける練習の實を挙げたり。唯舉動少しく敏捷を缺き、禮儀稍々整はざる所ありしは遺憾なりき。よく此等の點に注意して、益々膽を練り、技を修め、以て我部の發展を圖るべきなり。

十月三十日午前十時より、秋季柔道部大會を開き、午後三時終了す。詳細は次號に以て報道すべし。(阿武莊記す)

て、健兒の英姿は風爽として、間断なく場内を轟馳し、威聲所々に湧く。委員の命令は秋霜の如く、審判の一言は金鐵の如く、何の停滞もなく、競技は豫定以上の進捗の度を示した。かくて午を過ぐる頃より製次次第に詳し、時を經るにつれて、その數を加へ、午後四時頃に至れば、亮實席父兄席は勿論、さしもの廣き運動場も、立錫の地なきまでに、滿員を呈した。殊に我等の光榮とする所は、前文部大臣柴田家門氏以下、今村本縣理事官、並に本部長、其の他の貴顯紳士の貴臨を添うしたることである。團體競争としては、一年二年の綱引、二年の海戦、四年のマスト旗取、一年及び五年の百足競走、三年の千鳥旗送り、三年のランド操、二年の啞鈴體操等は、共に本日の觀物であつた。特に觀衆をして目の醒むるを覺ねしめたのは、一年の手旗體操であらう。紅白の旗一齊に動けば、紅の血潮滿面に溢れ、轉た華麗の感に打たれた。又元氣の鬱勃たるを禁するを得なかつたのは、五年四年の中隊教練であらう。劉曉たる喇叭の音、校庭に響けば、武裝整しき一軍、歩武堂々として、場内を廻る。秩序整然、軍規嚴肅、以て平常の素養と訓練とを併々に足る。又個人の各競技も、充分に肉體的精力の偉大、機敏的智能の必要を示し得たのは、満足に堪へぬ。かくして四時過ぎ、七十三回に亘る競技も盡く終り、本日の最終を飾る中隊選手競走は開始せられた。威聲に送られ、突撃を負ひて、スタートに立つ選手の心は、勇しくも雄々しき極みである。號砲一たび高く響けば、千百の廳

### 京都演武大會出演記事

大正七年八月、京都武藝殿に於て、第十九回青年大演武會を開くに當り、本校より出場の武道部選手の名及成績左の如し。

#### 劍道部

○(井町 敏正(本校) 一男(三重三中))

#### 柔道部

○(阿武 莊(本校) 熊井甚太郎(和歌山師))

○(長嶺 幸三(本校) 丹生 正夫(和歌山師))  
○(大谷 三郎(本校) 竹林 彌平(神戸高商))

### 陸上運動會記事

大正七年八月十八日、第十九回陸上大運動會が舉行せられた。此の日、天氣晴朗にして、眞に絶好の運動日和であつた。五百の健兒は、轉た運動熱の鬱勃たるを覺れた。生徒一同運動場に會し、朝風に翻々たる校旗の下に、樂隊の奏樂につれて、記念歌を一唱した。莊嚴言はん方なし。秋氣は愈清くして、生氣は天氣に磅礴して居る。午前九時、殷々たる煙花の響、秋是に轟くと共に、靜寂は忽ち破られて、瞬間の幕は切つて落された。見よ、健兒が面魂を、天をも衝かんする戦友の意氣を。月桂冠は誰が頭に落つることか。號砲の音、一發又一發、金天の空氣を激しく振動するに連れ

援旗は、入亂れ、援聲各處に起り、場は一しほそめき渡つた。奮然としてスタートを切つた選手の意氣、脱兎の如き疾走、共に體身の血の涌き返らんとするを覺せしめた。一回、二回先づ第四中軍の旗幟色めき、三回に及びて、石田君出で、益々勢を得、巔然頭角を現はす。而して六回に至りて、第二中軍の中谷君の快速、能く大勢を變換し得たが、此の第一中軍の勇者伊藤君の、突如として現るゝに及び、疾驅遂に第二中軍の北川君を抜き、悠々としてゴールに入る。あくかくして優勝旗は、第一中隊の手に落ちた。時正に午後五時、校長の閉會の辭ありて後、萬歳聲裡に解散した。鳴り響く仲秋の指月。空猶暗れて、埒に急ぐ夕陽二つ三つ。白煙塵く仲秋の指月。山は靜かに黃昏れて行く。本日主なる競技の優勝者次の如し。

第二十回早稲二千米。第一着、六分五秒、第五學年吉田 寛  
第二十八回同上。 第一着、七分、 第四學年玉木正夫  
第五十七回早稲三千米。第一着、十分卅五秒、第三學年河村茂一  
第六十九回早稲二千米。第一着、七分、 第二學年河上春亮  
第二十二回特別障害物。第一着、三分卅三秒、第三學年桑原松次  
第六十三回同上。 第一着、三分廿秒、第五學年大深安治  
第七十四回中隊選手競走  
第一着 第一中隊。四分十六秒。  
第二着 第二中隊。 第三着 第三中隊。  
第四着 第四中隊。  
尙今回よりは、個人競走の成績が、中隊の勝星に關係する

ことくなり、其の勝星は、第四中隊に得られた。抑新陳代謝は自然の理法である。今年もあれかと云ふ観衆の聲を應聞く我々の運動會も、本年は多少改良された観がある。吾人はこの趨勢が、將來猶永續されんことを希望して止まらぬ次第である。

本年の競技には、主として競争者の平素の練習の結果、即ち各自の實力が遺憾なく發揮され得べき男性的の者を選び、その勝敗が僥倖により、或は徒に市井の婦女子をして喜ばしむるが如き、女子的競技は全然これを廢した。此の意味に於て各方面に新生面が開拓され、一方には實力主義の短距離走の番數を増し、敏捷的知能を要する障礙物を奨励し、時機に適した武裝障礙物を鼓吹し、更に快哉を叫びしむるは、早坂二千米、共同障礙物等の新競技さへ加つた事である。又之に反して、一方には剛健の氣象を養ふべく、一方には成金の思潮を排斥すべく、抽籤競争、懸賞スパーン、郵便競争、提灯輪廻、英字綴字拾、計算數字拾等を、或は全廢し、或はその番數を減じ、猶且上級生の参加を禁じた。又團體遊戯の中では、毎年最も公衆の注意を惹く、五年、四年の中隊教練に於て、空砲が發火されることになつた。一個中隊が行ふ二回の一齊射擊、時節柄觀衆の氣分を緊張せしむることを得たらば又一幸である。

物價騰貴の餘波は、我校にも襲來した。從來運動場を飾つて居つた數個の綠門は、僅か一個に減せられ、音楽室も、寂し

き一天幕と變じた。これも亦時勢に適合したよき計畫である。又競技者が夫々各階層中隊別の運動縮を戴くのも、本年からの新機軸である、殊に注意すべきは、今回よりは和船競漕に於けると同じく、個人競争の成績が中隊の勝星に關係するといふことである。之れ亦運動會をして、一層有意義ならしめ益々盛大ならしむる一方法である。之を要するに、本年度の運動會が、幾分舊套を離脱し得たのは、共に喜ぶべきことである。

(高麗芳光記す)

### 書道部展覽會記事

我書道部展覽會は、十月十日開校記念日を卜して開催し、午前九時より午後四時半まで、一般公衆の鑑賞を許されたり。本年は昨年の如く、一年間隨時に學校にて書せし者を陳列せられ、其書多くは一時間を限り、教師監督の下に成り、即ち生徒の眞の實力の發表に意を注がれたるは、喜ばしき事なり。書法十則の訓を掲げられて、新に觀衆の頭腦に注意を與へしは、快心の至なり。さて今回の成績を學年別、中隊別に表記すれば左の如し。

學年	一等	二等	三等	等外	入選人數	全體對入選人數百分比
第一學年	一人	一人	十八	三十一人	四十三人	全體七十八人
第二學年	一人	一人	十八	三十一人	四十三人	全體七十八人
第三學年	一人	一人	十八	三十一人	四十三人	全體七十八人
第四學年	一人	一人	十八	三十一人	四十三人	全體七十八人

### 画道部展覽會記事

畫道部は、例年の如く、十月十八日の開校記念日を卜して、成績品展覽會を催した。成績品の審査は昨年と同様ならば、色彩の濃淡、畫面の大小等不規則な點が少いだけ、餘り視線を引かない様であつたが、規則正しいだけ、其の優秀は容易に識別するを得た。又直接眼に、彩華炫耀、丹青映射するもの少く、觀る者をして物足らぬ感を呼んだが、其の寂しさ、地味さの深いだけ、偽らない作品のバックには、自我の努力あり、雅致まり、濃麗な色彩無けれども、何處となく得難き尊さが感ぜられた。

本年出品總數四七五點。一等五名。二等二三名。三等四七名。等外一〇二名。

- 一年 服部達太郎 (提灯) 陸畫
- 二年 國弘 重幸 (雲) 陸畫
- 三年 岩武 且 (石膏像 寫生)
- 四年 松村 六郎 (家庭) 寫生
- 五年 和田 義忠 (投影儀) 用器畫

服部君のは學年相當と思つた。國弘君の圖は美事に色か出て居た、君の巧緻な筆致と鮮明な色彩は益々自重されん事を望む。岩武君の作、君獨創的筆致に乏しと言へど、觀察の精細なる筆勢の妙味は、確に努力の跡が忍ばれた。松村君の畫、

第三學年	一人	九人	十二人	四十二人	六十三人	全體九十八人
第二學年	一人	八人	七人	四十九人	六十五人	全體百五十八人
第一學年	一人	五人	六人	五十三人	六十五人	全體百三十二人
計	五人	二十四人	四十六人	三百三十人	三百二十二人	全體四百八十三人

中隊 一等 二等 三等 等外 入選總數 全體對入選人數均入選度數

第一中隊	一人	四人	九人	六十人	七十四人	全體百十九人
第二中隊	一人	八人	十二人	五十五人	七十四人	全體百三十三人
第三中隊	一人	四人	十二人	四十九人	六十五人	全體百十七人
第四中隊	二人	八人	十三人	六十六人	八十八人	全體百三十四人
計	五人	二十四人	四十三人	三百三十人	三百三十三人	全體四百八十三人

我部展覽會則、昨年改正せられしより、其の目録、諸士の盡力熟考と共に、改良發展の餘裕少なからず。或は名士の遺墨を集め、或は有志者の隨意書を掲載したらんには、一層面白かるべし。來るべき展覽會には、更に諸友の努力により、一層の發展を遂げんこと、切望して已まざるなり。

(百濟芳雄記す)



君の先天的獨特の手腕には、唯敬服の外無し確に當日の白眉であつた。是と相對して譲らなかつたのは、二等の結川君の用器畫で、君の油繪に悠々廻らざる輕快な筆も、かく緻密な製圖には、驚歎せざるを得なかつた。和田君の作は精巧に、緻密明瞭に書かれてあつた。

次に、家庭製作の部では、三年水戸君、四年堀君、松村君の作品は皆寫生畫にて、趣向に、筆致に、色彩に、畫面を飾れる獨特の筆は、吾部の權威であつた。又當日特筆大書せればならぬのは、五年山田孝介君の日本畫で、君の非凡の腕には、觀る者をして、後に瞻若せしむるの概あり。

終に全學年を通じて、前年に比し、進歩して居たが、家庭製作が一部の人の限られたのは、遺憾なれば、來年は、各自一作品は是非出品する積で、一層奮勵され、吾部諸部展覽會の益々盛大なる様、心掛けられん事を望む。

學年別成績の出品總數に對する受賞百分比は、二、一、四、三五年にて、中隊成績は、二、四、一、三中隊の順であつた。

(X生記)

地理歴史部展覽會記事

本校創立十九週年記念日の住辰を卜し、地理歴史部成績品展覽會を催す。今回の成績品は、一年より四年に至る各學年に於て目下學修中の事項に關するものより、各自任意に選擇せ

る題目に基き、題目の範圍廣きと、工夫の餘地大なりとにより、諸氏獨特の長所考案は、遺憾なく表され、進歩改良大なるものあり。左に當日、特に傑出せし諸氏の作を舉ぐ。

四年の堀君、君連年の熱誠敬服の至なり。世界地圖を蝶形に收めし優美なる技巧、世界一を網羅せる繪畫の妙腕、此れ君の天稟たる繪畫の才をもちて、始めて成し得る所たり。次に三年の山田君、精確佳麗なる通村模製地圖を製す。此れ蓋し最初の企にして、我部の一大進歩と稱すべし。二年藤原君作「萩附近地圖並防長名士像」一年藤井君作「關東地方地圖」何も精巧にして、刻苦の跡歴然として紙表に透つ。以上は、今回一等賞を得し諸氏なり。本年よりは特に一等賞各學年一名と限定せられしが爲、優良にして、尙一等の選に漏れし者少からず。就中、三年の室田君作「佛國模製地圖」同長谷川君作「アツチ東部地圖」の如き、最も優秀にして、會場を飾れり。一般に於て、本年成績の從來に勝るもの有りしは慶ぶべし。更に來年は、一層の進歩あるを疑はざるなり。唯徒に華麗に流れずして、正確精巧を以て第一目的となし、飽まで熱誠なる研究的態度を以つて、我部の進歩發展につくされん事を、望みて止まざるなり。

(吉田寛記す)

理科部展覽會記事

我部の展覽會は、十月十八日本校創立第十九回記念日を卜

して開催せられたり。陳列品は、五年級の製作にかゝる計算尺、四年級の考案になれるセンチメートル、昨年度四年級の考作せるアセチレン燈等なり。

中村君、福川君の計算尺に至りては、さすがに緻密にして、精巧なる此の人にあらずんば得られざる逸物、その努力只敬服の至なり。又四年級室田君以下のセンチメートル、君等の獨創的考案に接しては、只賞讃の聲を發して他を知らず。

乞ふ。明年は更に一步を加へて、我部の進歩發展を期せられんことを。

(井上盛義記)

大正七年度校友會役員

- 劍道部長 東 敬論  
 委員 磯部 好人 井町 敏正 露澤 一 金本 龍一  
 長嶺 幸三 佐々木正秀 天野 敏介 岡村 健二  
 平田 久一 松本喜八郎 山本 糾夫 中村 秀夫  
 山本 公輔  
 柔道部長 青野 教諭  
 委員 今田 正一 大谷 三朗 阿武 莊 小松 誠一  
 雜賀庚子四郎 山本登代治 桑原 松次 羽仁 通祐  
 吉田 博 村田 清男 田中 一雄 阿川 朝一  
 岩武 敏男 村上 定介  
 雜誌部長 金子 教諭

- 委員 新藤 武彦 福川 秀夫 吉田 寛 松浦 孝義  
 小松 誠一 高羅 芳光 矢島 真雄 岸 新一  
 阿部 芳甫 玉木 正夫  
 辯論部長 清水 教諭 同部長 田部 教諭  
 委員 井上 盛義 平田九郎治 志賀 義雄 高羅 芳光  
 瀧口 吉繼 阿部 芳甫 宮内 謙吉 天野 敏介  
 野村 龍介 原 吉雄 宮國 秀彦 瀧口 寛作  
 福田 寛悟 服部達太郎  
 書道部長 安藤 教諭  
 委員 和田 義忠 前田 壯一 百濟 芳雄 和田 卓  
 福本 珍甫 三好 城輔 玉木 止夫 平田 胤春  
 鈴木 研介 石津 有恒 井本 清 厚東謙七郎  
 山中 元夫 椿 正義 高田 真雄 一鬼正次郎  
 柴田 敏夫 小川 蕭 箭島 蕭 柱 賴之  
 堀野 孝男 下村 定儀 福田 幹雄 柏村 正  
 雷道部長 田總 教諭  
 委員 上川 忠天 熊谷 眞夫 山田 孝介 鷺母 一  
 松村 六郎 都野 豊 内田 秋藏 堀 儀一  
 藤原 智雄 室田 久雄 三戸 通夫 岩武 且  
 吉村 喜照 堀 豊治 上野 玉市 田村 豊  
 國弘 重幸 吉武 眞市 堀永忠太郎 里村 文二  
 竹内 忠雄 木村 秀雄 都野 克彦 羽鳥 彌教  
 地歴部長 梅村 教諭

- 委員 吉田 寛 村橋 徳治 山中 茂 赤川 傳  
 柴田 美穂 山縣 政 河内健次郎 石津兵太郎  
 伊藤喜兵衛 吉村恒助 伊藤康太郎 村上 定介  
 庭球部長 相島 教師  
 委員 前田 壯一 平田九郎治 井上 庸造 和田 卓  
 金本 龍一 尾木 忠夫 岡崎信三 津森 三郎  
 西田 正道 岩田 芳夫 山本清春 仁保 強  
 香川 義信 藤井 勝三  
 水泳部長 山本 教諭  
 野球部長 船木 教諭  
 委員 中村 敏雄 和田 義忠 清友勝三郎 飯塚 正規  
 雜賀庚子四郎 山本登代治 三上直行 三好 章  
 漕艇部長 山本 教諭  
 委員 山本 義男 岡 五郎 村木 榮熊 玉一市五郎  
 藤田 孫吉 岸 新一 野村 茂 金子 四郎  
 理科部長 清水 教諭  
 褒賞係 頼野 教諭 石井 教諭  
 委員 井上 盛義 門田 正男 久保 諭一 宮園 則義  
 器具係 清水 教諭  
 委員 石田 藤一 福川 秀夫 松浦 孝義 河村久三郎  
 西村 正人 山中 茂 三戸 雄一 金子 四郎

各中隊學科成績調査

年度	中隊名	受験人員	合點	平均點
大正六年度 第二學期各中隊學科成績表	第一中隊	二六	八五四	七四、〇
	第二中隊	二三	八九七	七三、三
	第三中隊	二七	八五三	七三、八
	第四中隊	二七	八四三	七三、一
大正六年度 學年試驗各中隊學科成績表	中隊名	受験人員	合點	平均點
	第一中隊	二六	八五六	七三、四
	第二中隊	二七	八五三	七三、八
	第三中隊	二九	八六七	七三、七
大正七年度 第一學期各中隊學科成績表	中隊名	受験人員	合點	平均點
	第一中隊	二八	八六五	七三、三
	第二中隊	二八	八五八	七三、四
	第三中隊	二九	八六八	七三、四
第四中隊	二三	八七九	七二、七	

校友會基金寄附

四月十七日、當地出身の岡本辰三氏より、金二百圓を、六月十三日、西田町竹原安次郎氏より、金百圓を、何れも、本校々友會基金中に寄附せられたり。因に、岡本氏は、本年、亡祖父栖雲先生の五十回忌に相當するを以て、其の佛事に要する費用の一部を省かれ、竹原氏は、亡夫人の遺志に基かれたるものなりと云ふ。

岡本栖雲先生の墓に詣つ

四月十九日、各組首席部長を總代とし、教員一同附添ひ、蓮池院なる、當地有名の儒學者故岡本栖雲先生の英靈を弔はんが爲め、其の墓に詣り、香花を供す。これ本年は、先生が五十回忌に當ればなり。安藤教諭の物せられたる先生の略傳、載せて史料欄内にあれば、就きて参照すべし。

大正六年度 秋中學校校友會費收支決算

一金九百六拾九圓五拾四錢五厘	收入 高
内 譯	
生徒會費	金八百七圓參拾錢
職員會費	金七拾壹圓九拾貳錢
雜收入	金九拾圓參拾貳錢五厘

校友會基金寄附

一金九百六拾九圓五拾四錢五厘	支出 高
内 譯	
基金蓄積費	金五拾圓
短艇新造蓄積費	金五拾壹圓七拾九錢
劍道部	金五拾貳圓四拾四錢
柔道部	金四拾貳圓四拾四錢
庭球部	金參拾七圓拾七錢
野球部	金六拾八圓拾參錢
游泳部	金拾圓四拾錢
雜誌部	金百拾貳圓九拾貳錢五厘
辯論部	金壹圓貳拾錢
書道部	金貳圓六拾七錢
書道部	金四圓
書道部	金五拾六圓貳拾九錢五厘
運動部	金百四圓拾壹錢五厘
運勤部	金貳百七拾九圓八拾六錢五厘
褒賞部	金四拾壹圓六拾六錢五厘
雜費	以上
壹年度へ繰越	

大正六年度 秋中學校校友會基金收支決算

一金貳千參百四拾壹圓拾四錢	收入 高
内 譯	

金千八百六拾貳圓四拾參錢  
金四百七拾八圓七拾壹錢  
前年度繰越金  
本年度實收高

金參百拾五圓  
寄附金  
校友會費より蓄積

金百拾參圓七拾壹錢  
利子  
支出高

金貳千參百四拾壹圓四拾四錢  
翌年度へ繰越

以上  
大正六年度秋中學校々友會短艇新造蓄積費決算

一金參百六拾貳圓貳拾壹錢  
收入高

金貳百九拾九圓五拾八錢  
前年度繰越金  
本年度實收高

金五拾五圓  
校友會費より蓄積

金七圓六拾參錢  
利子

以上

會友訃報

○石田四月君。(第十二回卒業生)山東省濟南三井洋行在勤中、腸痙攣に罹り、大正六年十一月死去。

○岡田亮一君。(第七回卒業生) 阿武郡佐々並村立長高尋常小學校長在職中、大正六年十二月十一日、急病にて死去。

○松浦鏡一君。(第八回卒業生) 大正七年二月死去。

○天津藤一君。(第十五回卒業生) 大正七年三月釜山に於て死去。

○守永喜平君。(第十三回卒業生) 在大連、大正七年四月十二日死去。

○厚東四郎次君。(第十二回卒業生) 福岡歩兵第二十四聯隊第三大隊第九中隊第一小隊長陸軍歩兵中尉たる君は、西伯利亞に出征中、八月二十三日午前七時、下士卒以下十九名の部下を引率して、將校斥候に出で、優勢なる敵の重圍に陥り、奮戦激闘の上、遂に壯烈なる名譽の戦死を遂げられたり。我等は本校より、君の如き忠勇にして、帝國軍人の龜鑑たる士を出ししを、大に誇とするものなり。

校誌

(自大正六年十一月至大正七年十一月)

○發火演習。大正六年十一月十七日、福川村羽賀壑に於て發火演習を行ふ。其の概況左の如し。

第五、四兩學年生徒を、二箇中隊に編成し、東西兩軍演習隊に分ち、東軍中隊は、山本教練指導の下に、午前七時半、西軍中隊は、中村教練指導の下に、同八時、何れも出發し、松本、福井道を羽賀壑に向ひ、運動を開始せり。

幹部  
東軍  
中隊長 田中 政太  
第一小隊長 河村 宜介  
第二小隊長 横山 真晴  
第三小隊長 瀧口 純

西軍  
中隊長 金子 重熙  
第一小隊長 花田 好定  
第二小隊長 尾崎 信一  
第三小隊長 中村 博

東軍想定  
一、東西兩軍ハ、今拂曉松本川ヲ隔テ、花々シキ戰鬪ヲ交ヘ

彼我共ニ多クノ損害ヲ被レリ。

二、十一月十七日、午前七時、田中中隊ハ、支隊長ヨリ左ノ要旨ノ命令ヲ受ク。

イ、支隊ハ主力ヲ以テ海岸道ヲ大井ニ向ヒ、陣地ヲ轉セ

ントス。

ロ、中隊ハ、午前七時半、陣地ヲ撤シ、松本、福井道ヲ羽賀壑ニ向ヒ、午前十時半マデニ、同高地ヲ確實ニ占領シ、支隊ノ左側ヲ掩護スベシ。

西軍想定

一、東西兩軍ハ、今拂曉、松本川ヲ隔テ、花々シキ戰鬪ヲ交ヘ、兩軍共多クノ損害ヲ被レリ、

二、十一月十七日午前八時、金子中隊ハ、支隊長ヨリ左ノ要旨ノ命令ヲ受ク。

イ、敵ノ主力ハ、大井方向ニ、一部ハ福井方向ニ退却セリ。

ロ、支隊ハ、此ノ敵ヲ追撃セントス。

ハ、金子中隊ハ、午前八時出發、松本、福井道ヲ前進シ

敵ノ左側ヲ脅威スベシ。

右想定に據リ、東西中隊長は、部下中隊に命令を與へ、第一小隊を後衛尖兵となし、松本、福井道を羽賀壑方向へ處

々の道路及び橋梁の破壊をなしつゝ退却せり。兩軍中隊長も亦、部下中隊に命令を與へ、第一小隊を尖兵となし、東

軍中隊を追撃せり。西軍尖兵の中倉崎に達せしとき、敵の斥候より射撃を受く。尖兵は之を撃退しつゝ前進せり。黒

川に達せしとき、敵の後衛尖兵、羽賀壑高地中腹にて掩護射撃をなす。西軍尖兵は、尙も、撃退の後、羽賀壑上に追撃せり。午前十一時二十分、西軍中隊長は、敵の本隊、御

陣山高地に陣地を占領せるの報に接し、敵偵察の後突兵たりし第一小隊を小丸山の線に、第二小隊を左翼に散開せしめ、第三小隊を掃隊とし、敵を攻撃前進せり。敵勢猛烈となるや、第三小隊を右翼に延伸増加をなし、攻撃前進中速刻、敵の騎兵、我が左翼に向つて襲撃し来るや、第一小隊を以て、此の敵を撃退せしむ。漸次、銃聲漸になり、遂に、哨戒突撃を實施し、演習を終了せしは、十二時過なりき。因に、此日第三學年以下は、見學をなせり。

○松陰先生追慕會。十一月二十一日、例に依り、松陰先生の追慕會を催し、安藤教諭の、松陰遺文講演あり。(講演筆記別項記載)

○皇太子殿下御影奉迎。十二月二十七日、是より先、皇太子殿下御影拜戴の爲め、上縣中なりし岩田校長、本日無事御影に供奉して歸校せらる。教職員及び生徒一同、唐櫃自働車會社前に整列して、奉迎申し上げぬ。

○長距離競走。大正七年二月九日、例に依り、萩一周長距離競走を行ふ。午前九時開始し、同十時五十四分無事終了。岩田校長、廣田教諭等参加し、大に奨励を加へられしかば、一同の元氣一層の旺盛を呈したり。其の成績左表の如し。

し。(行程二里五町)

等級	出發隊名	總人員	不参加人員	出發人員	到着人員	時間	平均一人時間
第一	第一隊	二二	二	二〇	二〇	三六、二二	四、〇三、六
第二	第二隊	二二	二	二〇	二〇	三七、三三	五、二〇、九
第三	第三隊	二二	二	二〇	二〇	三七、三三	五、二〇、九
第四	第四隊	二二	二	二〇	二〇	三七、三三	五、二〇、九
合計		八二	八	七四	七四	一、三〇、一七	
第一	第一隊	二二	二	二〇	二〇	三七、三三	五、二〇、九
第二	第二隊	二二	二	二〇	二〇	三七、三三	五、二〇、九
第三	第三隊	二二	二	二〇	二〇	三七、三三	五、二〇、九
第四	第四隊	二二	二	二〇	二〇	三七、三三	五、二〇、九
合計		八二	八	七四	七四	一、三〇、一七	

總評。第一等 第二中隊。第二等 第四中隊。第三等 第三中隊。第四等 第一中隊。

○比較試験。二月二十三日、縣下各中學校の第四學年牛生に就き、學力共通比較試験行はる。試験科目は、漢文數學の二科なり。

○卒業式。三月九日午前十時より、第十八回卒業式舉行せらる。知事代理として、西原縣視學臨場、山川東京帝國大學校長以下百五十餘名の來賓あり。例に依り校長 勸語を奉讀し、卒業生七十六名に卒業證書を授與す。次ぎて、知事代理の、懸賞與規程に據れる賞品、校長の賞品、同窓會長の賞品等の授與あり。終りて、校長の謝告、長官の告辭、來賓總代山川氏の祝辭、生徒總代福川秀夫君の祝辭、卒業生總代金子重君の答辭等、滞りなく進捗し、同十一時十五分無事終了す。

長官告辭

卒業生諸子ニ諭ク諸子今ヤ中學校ノ課程ヲ修了シ茲ニ卒業ノ榮ヲ荷フ是レ實ニ多年切實淬磨ノ結果ニシテ諸子ノ父兄ト共ニ本官ノ深ク欣ブ所ナリ  
 惟フニ諸子ハ或ハ進ミテ高等ノ學府ニ入り或ハ直ニ實務ニ従事スル等其ノ嚮フ所一ナラサルヘシト雖共ニ等シク本校ニ於テ受ケタル教育ヲ根柢トスルモノニシテ苟モ他地シテ怠ラスンハ豫メ前途ノ成功ヲトスヘシ然リト雖學海ハ茫洋トシテ際涯ナク世路ハ崎嶇トシテ障害多シ將來益々心身ヲ鍛鍊シ殊ニ學業ヲ研磨スルニアラサンハ安ク能ク素志ノ貫徹ヲ期スルヲ得ンヤ今ヤ歐州ノ戰亂紛糾ヲ極メ戰局ノ發展ト共ニ國家愈々多事ナラント正ニ是レ帝國ノ權威ヲ對揚シ國民ノ本分ヲ

校長告辭

諸子は、今高等普通教育を卒へて、是より専門的修養を積まんとなす。専門の研究は、活動の効果を大ならしめんとするに與つて力あるものなれど、其の根柢を培養せざれば、枝葉の繁茂は得て望むべからず。然らば其の根柢とは何ぞや。曰く五倫五常の道是なり。この五倫五常の道の根柢の上に置かれたる専門的研究ならざれば効果なし。此の意味を忘却することなく、日夜勤勉努力すべきなり。  
 徒に過去にのみ憧憬して、未來の貧弱なるは、之を老朽者と云ふ。余は萩の青年に、斯の如き懸念のあらざらんことを望む。固より歴史は尊重せざるべからず。過去を忘れざると同時に、將來に高き希望を以て、活動せざるべからず。  
 近時思想界の上に於て、金錢を過重する傾向あり。金錢の切味は甚だ鋭利なり。恰も正宗の名刀の如し。然れども、之を使用するに其の法を得ざれば禍を生ず。金錢も使用して始めて切味を知ることを得べし若し金錢に使用せらるれば、

其の人は福なり。  
要するに諸子は、人間の賤むべき道を忘れず、將來に大なる抱負を以て時勢の病毒に感染せず。一層の奮勵努力をなし、皇國の光を益々宇内に輝さんことに、盡力せんことを希望す。之を以て告辭とす。

卒業生の氏名左の如し。(イロハ順)

- |       |       |        |
|-------|-------|--------|
| 岩崎 小一 | 伊藤 敏三 | 入江 糾夫  |
| 磯野 敏機 | 今田 泰  | 花田 好定  |
| 原田 信治 | 原野 邦男 | 林 尙武   |
| 西永 彰治 | 友森 茂人 | 小方 皓   |
| 小澤 重一 | 尾崎 信一 | 和田 節二  |
| 河村 宜介 | 片山 弘  | 金子 達一  |
| 金子 武  | 金子 重徳 | 金子 壽三郎 |
| 横山 良晴 | 横山 靖次 | 吉村 潤一  |
| 高原 啓介 | 高木 彦三 | 田中 亥之助 |
| 田中 政太 | 田中 明三 | 田村 春秋  |
| 竹田 浩作 | 竹内 眞一 | 瀧口 純   |
| 田代 誠  | 坪井 七郎 | 恒石 八郎  |
| 中村 博  | 長井 茂雄 | 村上 壯一  |

- |       |       |        |
|-------|-------|--------|
| 村田 美穂 | 信常 兼道 | 大岩 龍起  |
| 大庭 秀景 | 大田 豊  | 大崎 恭次郎 |
| 奥田 清  | 國近 圭三 | 國重 誠   |
| 草刈 稔  | 山村 龜男 | 山崎 次郎  |
| 山本 篤一 | 山本 忠之 | 山本 信明  |
| 藤田 郁夫 | 藤村 六雄 | 藤井 正己  |
| 小川 清  | 兒玉 三郎 | 有福 精一  |
| 阿武 猛雄 | 阿武 二郎 | 阿座上 源助 |
| 櫻井 義彦 | 木村 平作 | 溝部 鶴   |
| 三井 資雄 | 三宅 勇  | 篠原 茂次  |
| 進藤 郁治 | 尾藤 尙  | 平田 繁一  |
| 守田 義秀 | 門田 莊吉 | 須子 基助  |
| 鈴木 正夫 |       |        |

受賞者氏名左の如し

- 一 銀制時計 壹個 (縣賞與規程に據れる者)
- 金子 重忠 田中 政太 瀧口 純
- 一 英和中辭典 壹冊 入江 糾夫
- 一 入學以來未ダ嘗テ一日モ怠ラズ皆勤四箇年精勤壹箇年ニ及ブ詢ニ照シタリト言フベシ因リテ前記ノ物品ヲ賞與ス
- 一半紙 壹束

友森 茂人 田中 明三  
平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リ且ツ伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ因リテ前記ノ物品ヲ賞與ス (各通)

一半紙 五帖  
林 尙武 小澤 重一 金子 武  
信常 兼道 山本 信明

平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リ且ツ伍長トナリテ前記ノ物品ヲ賞與ス (各通)

一半紙 五帖  
岩崎 小一 花田 好定 尾崎 信一

横山 良晴 吉村 潤一 中村 博  
本學年間伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタルニ因リ前記ノ物品ヲ賞與ス (各通)

一 精勤賞狀  
今田 泰 西永 彰治 片山 弘  
金子 壽三郎 竹田 浩作 坪井 七郎

中村 博 村上 莊一 大田 豊  
大崎 恭次郎 國近 圭三 藤田 郁夫  
阿座上 源助 進藤 郁治 平田 繁一  
門田 莊吉 鈴木 正夫

本學年間精勤セシニ因リテ之ヲ賞ス (各通)  
一 山口縣立秋中學校同窓會獎學賞  
金子 重忠 田中 政太

○陸軍記念日講話。三月十日午前九時十分より、竹内陸軍中佐の記念講話あり。同十時三十分終了。

○本縣知事來校。三月十四日、中川本縣知事來校せられ、生徒一同に對して、一場の講話を試みらる(講話別項掲載)

○賞品授與式。四月八日、始業式後引續き賞品授與式舉行せらる。受賞者左の如し。

一半紙 貳束  
第四學年 福川 秀夫 第一學年 原 吉雄

本學年間精勤シ學力俊秀ニシテ能ク校則ヲ守リ且ツ伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタルニ因リ前記ノ物品ヲ賞與ス (各通)

一半紙 壹束 五帖  
第四學年 小松 誠一 第三學年 岸 新一 阿部 芳甫  
第二學年 柴田 美裕 天野 敏介 第一學年 吉田 博

學力俊秀ニシテ能ク校則ヲ守リ且ツ伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタルニ因リ前記ノ物品ヲ賞與ス (各通)  
一半紙 壹束  
第四學年 藤原 敏男 第三學年 山中 茂 三戸 煥一  
郡野 豊 第二學年 石津 有恒 津森 三郎 藤田 長平  
三好 章 第一學年 伊藤 喜兵衛 吉武 惠市 藤原 勝利  
柴田 敏夫 野村 龍介

平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リ且ツ伍長トナリテ能ク其ノ

任務ヲ盡シタルニ因リ前記ノ物品ヲ賞與ス (各通)

一 半紙壹束  
第四年吉田 寛  
學力優秀ナルニ因リ前記ノ物品ヲ賞與ス  
一 半紙五帖

第四學年松浦孝義 河村久三郎 志賀義雄 中村敏雄  
高麗芳光 井上盛義 石田藤一 武田 正 杉山興二郎  
第三學年玉木正夫 福本稔甫 瀧口吉繼 矢島良雄 金  
木龍一 尾木忠夫 第二學年井本 清 松屋初五郎 岩  
武 且 鈴木研介 岸田隆吉 戸田茂雄 山縣 政 小  
島金作 篠原知雄 山根幸雄 椿 治六 櫻井武三 第  
一學年高田良雄 吉村喜熊 上野玉市 小川 薰 石津  
平 郎 山中元夫 椿 正義 田中一雄 能美 潔 松  
八郎 河内健吉郎  
本學 間伍長トナリ能ク其ノ任務ヲ盡シタルニ因リ前記ノ  
物品ヲ賞與ス (各通)

一 精勤賞狀  
第四學年大深安治 山田 基 上川忠夫 井町敏正 藤  
田重成 柴田健正 伊藤富士雄 河上勇治 第三學年堀  
一 清石 綿屋誠一 河村義雄 河村禮二 金子四郎 田中  
文夫 中村周郎 松本忠一 粟屋 稔 三村喜治 第二  
學年戸倉芳太郎 富田正次 岡崎信之 永富三介 永井  
博通 植田 浩 大藤 豪 熊井孝三 寺田俊三 阿武

倫館に於て、陸軍中將三浦梧樓子の講話あり、生徒一同聽講  
に赴く。(講話別項記載)

○見玉中將講話。 四月二十四日、見玉中將來校。午後  
二時より講堂に於て、一場の講話を試みらる。

○學友長改選。 四月二十六日學友長の改選行はる其の  
結果左の如し。

- 東秋學友區 區長 田中 教諭 副長 中村 敏雄  
第一小區學友長 松浦 孝義 副長 松原 粹  
第二小區學友長 伊藤富士雄  
南秋學友區區長 相島 敬師  
第一小區學友長 井上 盛義 副長 井町 敏正  
第二小區學友長 高麗 芳光 副長 池田 實三  
第三小區學友長 河上 勇治 副長 富田 正次  
藤本 善一  
西秋學友區 區長 池上 教諭 副長 新藤 武彦  
第一小區學友長 武田 正 副長 山田 基  
第二小區學友長 吉田 寛 副長 山田 基  
北秋學友區區長 木田 教諭 副長 門田 正男  
第一小區學友長 福川 秀夫 副長 阿部 芳甫  
第二小區學友長 小枝 慎一 副長 廣 榮一  
第三小區學友長 綿谷 三郎 副長 熊谷 眞夫  
石田 藤一 副長 熊谷 眞夫

俊雄 桐山慶二郎 守田吉光 第一學年岩田芳夫 西田  
正道 小野道治 河上春亮 兼田重徳 神田壽治 田中  
徹明 田村 豐 武田憲雄 坪井榮雄 櫻鐵之進 内藤  
茂 中村章祐 村木 曠 能美惠一 黒川克彦 國弘重  
幸 山本平一郎 松崎彌太郎 藤井眞澄 普喜良衛 阿  
部 武 有吉治平 淺野秀孝 安藤仁一 安藤次郎 白  
神鴻一 島本竹次郎 惠本義正 平田久一 鈴木正知  
第四學年今田正一 石田藤一 飯塚正規 窪海 一 津  
田信 中村敏雄 村橋徳治 大谷三朗 松岡通雄 門田  
正男 第三學年池田 顯 林 英男 小野 正 河村直  
衛 野村 茂 小林義雄 粟屋 豐 寺田猪三郎 第二  
學年岩武 且 田中秀光 中谷由路 阿武英一 第一學  
年野野俊一 一鬼正次郎 石津兵太郎 紙屋正一 吉田  
博 吉屋正嘉 田北 貴 中山善雄 上野玉市 井町吉  
助 大島太郎 松島 誠 有吉信一 磯崎長久 門田省  
三  
本學年間精勤シセニ因リ之ヲ賞ス (各通)  
一 半紙五帖  
第三學年尾木忠夫 福本稔甫 金本龍一 櫻野 實 石  
津房夫 西村止人 吉田鶴太 赤川 傳  
本學年間室長トナリ能ク其ノ任務ヲ盡シタルニ因リ前記ノ  
物品ヲ賞與ス (各通)

○三浦將軍の講話。 四月二十四日、午前十時より、明

秋原 新一  
中秋學友區 區長 安藤 教諭 副長 長嶺 幸三  
第一小區學友長 村橋 徳治 副長 玉木 正夫  
第二小區學友長 小松 誠一 副長 三戸 雄一  
第三小區學友長 志賀 義雄 副長 國重敬四郎  
椿東學友區 區長 頼野 教諭 副長 安藤 義雄  
第一小區學友長 池永 正治 副長 櫻松 嶺造  
第二小區學友長 笠原 二人 副長 櫻松 嶺造  
第三小區學友長 岡 五郎 副長 櫻松 嶺造

椿學友區 區長 田總百合之助  
第一小區學友長 石井 直太 副長 池内 茂  
第二小區學友長 中村 岩穂 副長 藤田 重成  
山田三見學友區 區長 山本百合熊  
第一小區學友長 前田 吉久 副長 伊藤 五一  
第二小區學友長 山本 義男 副長 玉一市五郎  
第三小區學友長 高 勉 副長 植村 文樹  
森田 胤光

○修學旅行。 五月八日、第四學年旅行隊は、東、清水、石  
井、中村諸教諭引率の下に、三泊四日の探定を以て、九州方面  
へ出發す。(修學旅行記参照)

○一日修學旅行。 五月十一日、左記の如く、一日修學  
旅行行はる。

71

第五學年 玉江久原礪山見學 第三學年 川上村廣落瀧  
第二學年 日輪山南明寺 第一學年 萩近傍史蹟調査

○海軍記念日講話。五月二十七日午前八時より、栗屋  
海軍中佐の、仁川海戦に關する講話あり。同十時終了。

○開校記念式。十月十八日午前八時より、第十九回開  
校記念式を舉行す。來賓數十名あり。校長の式辭に次で、來  
賓總代藤原大佐祝辭を陳べ、同九時終了。式後、校友會の  
催に關る、陸上大運動會、書畫道、地歴理科等の展覽會ありた  
り。

○貴族院議員柴田家門氏來校。十月二十一日午前  
十一時三十分、貴族院議員柴田家門氏來校。生徒に對し一場  
の講話を試み、二三の授業及寄宿舎を參觀して、同三時頃退  
出せらる。因に、氏は、今回、故木戸孝允公に關する史料蒐  
集を主として、傍、學事觀察の爲め歸郷せられしものなりと  
云ふ。

○陸軍少將國司精造氏來校。十月二十三日午前十  
一時、武學生養成所主幹陸軍少將國司精造氏來校せられ、生  
徒に對し一場の講話を試みらる。劈頭に於て、「日本の國には、  
三つの勝れたる歴史がある。第一、我國は神國であり、皇室  
は神孫であり、我等の行ふ道は神の遺された道である、こと。  
第二、君臣上下の名分が明であつて、しかも其の間に、親密  
なる情誼のあること。第三、以上述べた第一第二の事實より

觀せしめて、先帝の、御實業御勤儉に渡らせられし、御模倣  
の一端を講話せられ、聽衆に多大の感動を與へて、降壇せら  
る。時方に正午なりき。

○理化實驗室新築。歐洲大戰亂の、我國に及ぼす影響  
は、蓋し多からん。就中、國民に理化的智識を要求するに至  
りしことは、最も其の著しきものなるべし。従つて、國家が  
此の要求を充たさんが爲に、學校に於ける此の科の奨励に、  
力を盡すことも亦大なりとす。我校に於ては、如上の趣旨に  
據り、今回新に理化實驗室の建築あり。大正七年六月起工  
し、同九月竣功す。輪奐の美、設備の完全、兩々相俟ちて大  
に光彩を放てり。而今而後、此の室に學ぶものは、奮勵一番、  
以て國家の期待する所に副はんことを、庶幾すべきなり。

○久原富美氏獎學金規程追加。今回、久原富美氏  
獎學金規程に在の追加ありたり。

第一、同一年度卒業生中ヨリ規定ノ給費生三名ヲ選拔ス  
ルコトヲ得ザルトキハ其ノ翌年度卒業生ヲ以テ之  
ヲ補充スルコトヲ得若シ其ノ翌年度卒業生中ヨリ  
之ヲ得ザレバ順次年度ヲ繰リ下ケルコトヲ得  
第二、止テ得ズ半途給費ヲ停止スルコト、ナリタル時ハ  
休學者ノ場合ヲ除キ其ノ補充トシテ新ニ給費生ヲ  
選定スルコトヲ得但シ補充給費生ニハ其ノ卒業年  
度ヲ限ラズ  
(参考) 現規程第二條ノ次ニ右第一ヲ第三條トシテ  
又第七條ノ次ニ右第二ヲ挿入シ以テ然ルマ  
ク條ヲ改ム

して、天地に磅薄した正氣を生じて居る。これが即ち大和魂  
であること。是れである。而して此の大和魂は、我國の眞髓  
であつて、此の氣盛んなれば、國家は永久に榮耀、之に反す  
れば忽ち衰へるものであるから、此等の事を篤と承知して、  
君國の爲に、身命を致すと云ふことを忘れてはならぬ」と注意  
し、それより話頭を一轉して、歐洲大戰亂の事に及び、「歐洲  
大戰亂の影響として、十年乃至十五年の後には、日本に  
大なる國難が來るであらうと思ふ。歐洲の戰亂は、帝國主義  
と民主主義との争である。而して、帝國主義を以て立つ獨逸  
も露西亞も、あの通りである。そこで今度は、我國が、世界  
を相手にして争はなければならぬ運命を有して居るのである。  
憂國の士は、今より之に對する計畫をすることが必要である」と  
警告して、學生の一大覺悟を促し、それより英、佛、獨に於  
ける出兵の状態を説き、「英軍が、いつも獨軍に敗るるは、  
幹部に其の人を得ないからである。而して幹部を養成するに  
は年數が掛る。決して一朝一夕に出来るものではない。此の  
理を推して考ふれば、我國に於ても、今より幹部を養成して、  
將に來らんとする國難に備へねばならぬ」と叫びて、武學生  
志願者の多數に出でんことを望まれ、最後に、「我國が今度の  
戰亂に依りて、十數億の金を儲けたので、國民の間に、漸次  
奢侈の風を養成し來りて、戊申詔書の御聖旨に反すること  
が多い」と慨歎し、それより、生徒に、御内殿に於ける御障子  
の紙、御壁の漆喰（共に油煙にて黒色に染りたる者）の實物

### 送迎彙報

○田原先生。今回、山口高等商業學校の招聘に應ぜられしに  
依り、十一月二日(大正六年)告別式舉行せらる。  
○岡田書記。久しく病氣にて引籠養養中の處、十一月三日附  
にて依頼免職。  
○原田幸植氏(陸軍砲兵曹長) 十一月三日附を以て書記に任  
命。  
○猪川先生。福岡縣立傳習館中學に榮轉に就き、十二月七日  
告別式舉行。  
○東先生。(元滋賀縣立膳所中學校教諭) 今回東暢先生の後  
任として就職。一月十一日(大正七年)紹介式舉行。擔當歴史  
科。  
○山元先生。家事上の都合に依り退職。一月三十日告別式舉  
行。  
○田部先生。鹿兒島縣立川内中學校より轉任。三月二十三日  
紹介式舉行。擔當英語科。  
○藤原先生。這回病氣の故を以て退職せられ、四月八日告別  
式行はる。  
○川井先生。四月三十日紹介式行はる。グレーナム先生の後  
を承けて、英語科を擔當せらる。  
○藤井先生。嘗て本校に教鞭を採られたることあり。今回、  
廣島縣立忠海中學校より轉任。六月十八日新任式行はる。擔  
任數學科。

○長見先生。七月三十一日附にて、山口縣立豊浦中學校に榮轉。  
○小谷正勝氏。七月三十一日附にて、劍道指南手を囑託せらる。

○中山先生。八月九日附にて福岡縣立朝倉中學校に榮轉。

○廣田先生。八月十四日附にて依願免職。

○末先生。九月 日新任式舉行。擔當英語科。

○青野先生。九月十六日紹介式舉行。國語及漢文科と柔道とを擔當せらる。

○岩坪先生。今回大分縣立宇佐中學校より轉任せられ、九月二十一日新任式舉行。擔當學科英語。

○時山孝一氏。九月三十日附にて、理科助手、に任命せられ又劍道指南手をも囑託せらる。

○誠之學舎(本校寄宿舎)近況。今回誠之學舎にては、新に五室を増築して、略三十名を増収し得ることと爲りしを以て、從來三學年生以下に限りて收容せしを改めて、本學年度よりは、四學年生をも收容して、舍生略九十名に達せり。將來は、五學年生をも收容する方針なり。入舍許否に就きては、成るべく該地方に縁故なきもの、及上級生よりも下級生を採れり。舍生指導の方針としては、自治的、家庭的、勞働的主義を執り、幾多の改善を斷行せり。舍と家庭との連絡としては、體力検査表を作りて、舍生體力發達の状況を父兄に知らしめ、又一週間以上に亘れる病氣欠席者の容體を通

知し、成績及操行につきても、機會を捉へて、特別の變化を知らしむるに努めつゝあり。

武道寒稽古出勤狀況表

(甲) 出席者一日平均數調

年 度	延人員	一日平均出席人員	部員數	百分比
大正五年	一八六	一〇四	一七二	六〇
大正六年	二二七	一〇九	一九三	五六
增	五四	五	二一	五
減	三三	一	三	一
大正五年	三九六	一六三	二二二	五五
大正六年	三六二	一六二	二二二	五五
增	三三	一	一	一
減	三三	一	一	一

(每日平均全生徒の五割七分出勤)

(乙) 皆勤者調

年 度	皆勤者數	部員數	百分比	精勤者數	百分比
大正五年	六	一七二	三	〇	〇
大正六年	七	一九三	四	二	一
增	一	二一	一	二	一
減	一	三	一	二	一
大正五年	一〇	二八二	三	二	一
大正六年	八	二八二	三	二	一
增	二	二	一	二	一
減	二	一	一	二	一

(全生徒の三割五分皆勤)

附

錄



附 録

山口縣立萩中學校沿革略

本校は舊藩主毛利氏の設立に係る巴城學舎に蓋陽す○後改めて公立中學校となし明治十一年五月又改めて山口中學校の分校として大に教則を改正す○十七年山口中學校の高等中學校となり文部省の所屬に歸するに及び三月十一日を以て本校は萩分校と改稱せられ高等中學校の豫備校となれり○二十年四月一日改めて萩高等小學校別科と稱せられ重見經誠氏主幹となる同年八月重見氏轉任し綿貫謙輔氏代る○同年十二月萩學校と改稱せらる○二十一年一月職制の改正あり綿貫氏校長に任せらる○二十三年四月公立を改めて私立とせられ防長教育會の所營に歸せり○二十九年九月防長教育會之を本縣に寄附し山口縣立山口中學校の分校となし校則の全部を改正す○四月一日綿貫氏萩分校主事を命せられ○三十年八月三十一日山口縣尋常中學校萩分校と改稱せらる○三十一年三月教諭渡邊盛次郎代りて主事

心得となる○同年四月渡邊盛作氏主事に任せらる○三十二年九月一日分校より獨立して山口縣立萩中學校となり縣令を以て規則を發表し職別並に事務章程を定められ元萩分校生徒二百九十三名に加へて新に百十名の入學を許し渡邊盈作氏校長心得を命せらる是より先校舎は江向村なる明倫館跡に在りしが是に至り堀内村なる新築校舎に移る○同月十八日雨谷羔太郎氏校長に任せらる○十月十八日開校式を行ひ此日を以て本校の紀念日と定む○三十四年四月十五日第一回卒業式を行ふ卒業生三十七名是月始めて補習科を設く○三十五年二月新築寄宿舎を開き舎生を收容す○同年四月十七日第二回卒業式を行ふ卒業生四十二名○三十六年三月二十九日第三回卒業式を行ふ卒業生五十一名○三十七年三月三十日第四回卒業式を行ふ卒業生五十二名○同年十月十二日雨谷校長病歿せられ教諭塚本又三郎氏校長事務取扱を命せらる同年十二月七日塚本氏校長に任せらる○三十八年三月二十七日第五回卒業式を行ふ卒業生四十三名、是月縣令を以て共通入學試験の制を定めらる○同年八月塚本校長第二高等學校に轉任せられ教諭岩田博藏氏校長事務取扱を命せらる○九月長崎縣立島原

中學校長羽石重雄氏校長に任せらる。○三十九年三月二十七日第六回卒業式を行ふ卒業生六十一名○四十年三月二十七日第七回卒業式を行ふ卒業生五十六名○四十一年三月二十四日第八回卒業式を行ふ卒業生四十四名十一月三日戌申詔書奉讀式を講堂に行ふ○四十二年三月二十三日第九回卒業式を行ふ卒業生三十八名本年より縣令を以て共通試験を廢せらる。○四月三十日羽石校長岩國中學校長に轉任せらる。○五月七日熊本縣立八代中學校長村上俊江氏校長に任せらる。七月七日戌申詔書奉讀心得を願つ。○四十三年三月二十四日第十回卒業式を行ふ卒業生四十九名○四十四年三月二十四日第十一回卒業式を行ふ卒業生四十七名○四十五年三月二十四日第十二回卒業式を行ふ卒業生五十二名○七月一日久原氏奨學金給與規程成る。○大正二年二月七日訓令第五號を以て山口縣立中學校共通入學試験施行規程を定めらる。○三月二十七日第十三回卒業式を舉行す卒業生九十五名○十一月四日久原氏奨學金給與規程第五條の次に現第六條を追加し元第六條以下を順次繰下ることゝなれり。○三月十九日第十四回卒業式を舉行す卒業生五十九

名○四年三月二十日第十五回卒業式を行ふ卒業生六十七名○五年三月二十四日第十六回卒業式を行ふ卒業生六十九名○八月三十日村上校長退職せらる。○九月二十五日愛媛縣立松山中學校長岩田博禮氏校長に任せらる。○十一月三日立太子禮奉祝式を舉行す。○六年二月四日皇后陛下御眞影奉戴式を行ふ。○三月二十二日第十七回卒業式を行ふ卒業生六十九名○十二月二十七日皇太子殿下御眞影を奉戴す。○七年二月二十一日久原氏奨學金給與規程第二條の次に現第三條を又第七條の次に現第九條を追加し元第三條以下を然るべく繰下ることゝなれり。○三月九日第十八回卒業式を行ふ卒業生七十六

### 職員表

(大正七年十月末現在)

受持學科	職名	就職年月	氏名	原籍地
修身、英語	校長	大正五年九月	岩田博藏	山口縣
修身、歷史	教諭	大正七年一月	東 尚胤	琦玉縣
英語	同	明治三十二年九月	頼野 多介	山口縣
國語、作文	同	明治三十二年九月	安藤 紀一	同
代數、幾何、三角	兼教諭	大正二年四月	木田 藤吉	三重縣
法	兼教諭	大正七年六月	藤井 一郎	廣島縣
代數、幾何	同	大正七年三月	田部 克己	島根縣
英語	同	大正六年一月	元重 旦二	大分縣
國語、漢文、作文	同	明治三年八月	田中 市郎	山口縣
博物	同	明治四十年四月	金子 乙助	同
國語、漢文、作文	兼教諭	大正四年十二月	梅村 清光	茨城縣
地理、歷史	兼教諭	大正五年三月	池上 銅他郎	石川縣
地理、歷史	同	明治三年八月	田部 百合之助	山口縣
圖書	同	大正六年九月	清水 敏二郎	廣島縣
物理、化學	同	大正五年一月	船木 秀一	山口縣
算術、代數、幾何	同	大正七年十月	岩坪 友幸	鹿兒島
英語	兼教諭	大正四年十月	石井 登久	岡山縣
國語、漢文、作文	兼教諭	大正四年十月	石井 登久	岡山縣

體操、習字	同	明治三年八月	山本 百合	山口縣
漢文、作文、柔道 <td>同</td> <td>明治四年二月</td> <td>中村 正治</td> <td>同</td>	同	明治四年二月	中村 正治	同
會計 <td>同</td> <td>大正七年九月</td> <td>青野 芳三郎</td> <td>愛媛縣</td>	同	大正七年九月	青野 芳三郎	愛媛縣
庶務 <td>書記</td> <td>大正六年十一月</td> <td>原田 幸槌</td> <td>山口縣</td>	書記	大正六年十一月	原田 幸槌	山口縣
英語 <td>同</td> <td>明治五年三月</td> <td>三輪 助</td> <td>同</td>	同	明治五年三月	三輪 助	同
體操 <td>兼教諭</td> <td>大正七年八月末</td> <td>七太郎</td> <td>石川縣</td>	兼教諭	大正七年八月末	七太郎	石川縣
英語	兼教諭	明治三十九年三月	相島 直一	山口縣
物理、化學、劍道	兼教諭	大正七年四月	川井 運吉	秋田縣
劍道	兼教諭	大正七年九月	時山 孝一	山口縣
	指南手	大正七年七月	小谷 正勝	同
	校醫	大正元年十月	玉木 丞輔	同

### 學級數及生徒數表

(大正七年十月末現在)

種別	補習	第五學年	第四學年	第三學年	第二學年	第一學年	合計
學級數	1	2	2	2	3	3	15
生徒數	1	20	20	20	25	25	111

### 武學貸費生

(大正七年十月末現在)

第五學年	中村敏雄、村橋徳治、阿武健介、杉山興二郎
第四學年	三戸雄一、河村直衛

寄贈雜誌

- 一、校友會雜誌 二十一號 大島商船學校校友會
- 一、校友會會報 十七號 山口縣立岩國中學校
- 一、同窓會報 十三號 山口山口中學校校友會
- 一、保惠會雜誌 百十二號 愛媛松山中學校保惠會
- 一、學友會報 五十八號 山口高等商業學校學友會

- 一、校友會誌 二十號 山口德山中學校校友會
- 一、校友會雜誌 十六號 山口豐浦中學校校友會
- 一、三田評論 每號 慶應義塾
- 一、早稻田學報 每號 早稻田大學校友會
- 一、高千穂學報 十七號 東京高千穂學校
- 一、知道月報 每號 茨城水戸中學校知道會

會告

- 一、本誌は會友諸君の寄稿を切望す。期限は九月末日までとす。用紙隨意。
- 一、本誌の發行は毎年十一月とす。

大正七年十一月廿五日印刷  
大正七年十一月三十日發行

【非賣品】

發行兼編輯者 山口縣阿武郡樺村 三輪 勗

印刷者 山口縣吉敷郡山口町道場門前第九番地 大津 いわ

印刷所 全上 山口響海館

